

ヒンズー教の梵論

【その3】

ヴィシスタードヴァイタ・ヴェーダーンタ
～ 梵我物峻別一如論学派による
『五大妙徳論』, 『梵力五大妙機論』,
『大行梵説』, 『万有有限説』, 『化梵説』,
とその神学的な奥義の特色～

Brahmanology of Hinduism [Part 3]

霧 島 怜

Rei S. Kirishima

序

- 一. 梵の本然性質の根本大妙徳を論述する「五大妙徳論」
- 二. 梵の自然大妙機を論述する「梵力五大妙機論」
 - ① 梵の生命力の無極神秘を論ずる「絶対自力説」
 - ② 宇宙開闢以前の梵の妙態を論ずる「梵力静養説」
 - ③ 梵の創造的, 存養的と君臨的な活現成を論ずる「梵力三大行説」
 - ④ 創世の究極目的と梵の無極悦楽を論ずる「無償恵愛説」
- 三. ヴィシスタードヴァイタの「大行梵説」と「万有有限説」
 - ① 絶対不二一元論的な「無明説」とその批判の要点
 - ② 梵我物峻別一如論学派による「大行梵説」と「万有有限説」
- 四. 梵の本然性質とその徳力を示す御名
- 五. 梵の救済的な活現を論ずる「化梵説」

結語にかえて～上説の神学的な奥義の特色

註と文献

RESUME

序

人類の存在的な経験、特に、その精神的な遺産を元に、万代万民の聖哲は、絶対的な存在、万我物事象とその相互関係の性質と徳力諸相の究明に全力を尽して来たのである。ヴィシスタードヴァイタ・ヴェーダーンタの神学者と哲学者も例外ではない。

今まで二回に亘って、太祖ラーマヌジャ (^{1017~}_{1137A.D.}) と大論辨家ヴェーンカタナータ (^{1268~}_{1369A.D.}) を初め、ヴィシスタードヴァイタが提唱する梵論の根本的な哲理を説明し、その神学的な奥義の特色を叙述した。その中で特に、梵の絶妙極まりない性格を論述する「妙格説」、梵の超徹的な霊質を論ずる「大魂魄説」、梵の神秘的な実体性を論弁する「太極実体説」、一切劫界とその万有千化を梵身の一現と観て、その性質を説示する「活現成身説」、梵と一切有の相互関係とその真相の面々を論ずる「異性同質説」、「親疎一如説」と「因果現成説」の根本的な哲理を説明し、神学的な意味とその特色の心髄を述べた。

今度も引き続き、神仏梵論や哲学を傍観し、実生活から切り離して扱っている学者としてではなく、知行一致という人生の姿勢をもって、インドの梵学と哲学、スコラ系の神学と哲学や仏教学（特に「仏性論」や「仏身論」の如きもの）とその比較的な探索に著しい貢献をした者の深察を元に梵論の考察を進める。更に、前回と同様に、本論文も、ヒンズー聖典やその註釈書の単なる語原的な分析ではなく、ヴィシスタードヴァイタ（特に、ラーマヌジャとヴェーンカタナータ）が唱えている教理を中心に、当学派の梵論定理を考察し、ヴィシスタードヴァイタの梵学、スコラ的な神学と仏教的な仏性論に通ずる概念をもって、独自に説示したい。

この論考の資料と方法は、ランガチアリヤ・M., チアリ・S.M. シリニヴァサ, ダスグプタ・S., カルマン・J.B., 加藤精一, 中村宗一, 岡田宣法, 寺田弥吉, エリアデ・M., 八木誠一や門脇佳吉等（基礎文献と参考文献を参照）の論著に頼る。

本論文で、引き続き、ヴィシスタードヴァイタの梵論における根本哲理の紹介とその神学的な奥義の特徴を取り扱う。今まで、梵という存在を梵我物事象の相互関係 (*in relatione ad alios*) を中心に考察して来たが、今回、一転して、一切有の究極的な本末因に値する梵の面よりも、万世万有の有無とその相関の次元を越える梵の本然性質の大妙徳とその性能 (*Brahman 'ut est in se'*) 自体、即ち、梵を「梵」たらしめる本然自内性の絶妙極まりない徳力とその活現の根本に心眼を向け、ヴィシスタードヴァイタの立場とその神学的な特色に目を注ぐ。

具体的に、梵の自然性質の根本大妙徳を論ずる「五大妙徳論」、梵の自然大妙機を論述する「五大妙機論」、梵行の無辺際性を論ずる「大行梵説」、一切劫界とその万我物事象の永遠の不完全性と欠如性を論述する「万有有限説」および、梵の無償寵愛を出発点とする救済的な活現を論述する「化梵説」の心髄を説明し、そこに含まれている哲理の神学的な主意とその特色を指示する。それに、ヴィシスタードヴァイタの大行梵説と万有有限説に関連して、アドヴァイタが唱道する「無明説」の根本定理とヴィシスタードヴァイタ的な批判の要点にも言及する。

*（論文中の引用文は、「文字」通りの訳ではなく、術語の本義と文脈の意味を最優先した「英文」

からの私訳である。)

一. 梵の本然性質の根本大妙徳を論述する「五大妙徳論」

ヴィシスタードヴァイタによると、一切世界を構成する梵、万我、万物とその万象千化を^{しん}参察すると、概して、万有事象の形而上下界を遍徹しながら養濡する梵の親近的な面 (*saubhāgya, accessibilitas*) と同時に、万我物事象の世界を無限に超絶する梵の卓越的な面 (*paratva, isitrtva, inaccessibilitas vel superioritas absoluta*) を見極める事が出来る。梵我物事象のこうした峻別不離で親疎一如の連結は、梵我物を直接の発生地、地盤と万有の完成を目的とするが、その関係の究極的な本源、存養主、通総主と終末は梵のみである。梵、万我と万物事象の本来で永遠の異性同質、梵を本末因とする梵と万世千界の峻別不離で親疎一如の関係における梵の本然性質と、その属性を梵身(即ち、万我物事象)の観点のみを中心に論述して来た⁽¹⁾が、以下、万物事象の世界を越えながら梵智に通ずる人我の靈力を論説の基盤と主眼とし、梵の本然性質とその徳力の無尽蔵界自体に考察の焦点を絞り、ヴィシスタードヴァイタの見解心髄とその哲学および神学的な定理の特色を説示する。

梵の世界においては、本来無窮で絶美極まりない性質に属しない徳力や性能が一つもないが、梵の本然性質の内には、梵を絶対唯一無二の存在とあらしめる徳力、即ち、梵を匹儔なき大魂魄、無上の妙格神、無限で無尽の生命を有する太極実体(自存自立神)、全能全智の創造主、自由自在の本末因、全面的に不依自立的な万有の存養主や一切有の究極目的とあらしめる本来根本的な徳力 (*svārūpa-nirupaka-dharma, natura essentialis, attributa essentialia*) および、非根本的、即ち、或る一定の時に生成化育し、増減や隠顕する善美徳 (*nirupāta-svārūpa-viśeṣaṇa, natura per se non essentialis, attributa non essentialia*) が峻別されている。梵の本然性質を構成する無量の善美徳の中の根本的な善美徳が永遠で不依であるのに対して、顕晦したり動静したりする徳力は、各々の実質において根本的な徳力に依存し、自然で不離の絆で結ばれている(根本徳力の)属性であるという見解は、ヴィシスタードヴァイタの通観である⁽²⁾。

以下、ヴェーダーンタの諸聖典を論釈の中心とするラーマヌジャの言葉を借りて、梵の隠現的な性質の無尽蔵、特にその根本相を成す、五大妙徳とその真相を描く文を引用し、文脈や術語の本義を明確にするために、所々ある文書を若干に敷衍しながら紹介する⁽³⁾。

『[Satyam, jñānam, anantam, ānandam, amalam Brahma, (即ち) 梵は、実存性、慧智、無限性、^{けい}慶福と完全無欠性(等の無量で絶美の徳力)を本然性質とする存在者である] [Taittirya Upanisād, I, 1; II, 1; 12; Vedānta Sūtra, III, 3; Brhadāraṇyaka Upanisād, III, 9]⁽⁴⁾』という句は、一切世界と異なっている梵の本然性質の根本徳力を明確に示している。「存在」という語は、斯る梵が完全に自由で無限に不依の自存自立有であると強調する。万変千化する万物事象や物質と何等かの関連をもつ個我は、この「絶対的な存在」という概念が示している世界には含まれていない。それは、何故かと言うと、万我物事象が多種多様で様々な変化を蒙ったり、様々な徳力や形態を受捨したりするので、制約されないままで無限に実存する事が不可能だからである。更に、「慧智」という語も、梵が無明、幻影、一瞬の未知や真知の減縮ではな

く、不生不滅で超感覚的かつ無尽で無辺際むへんがいの明知を本有すると表示する。しかし、完全解脱くわんげつたつの真知でさえ、迷悟の転倒や増減の経歴を有する故に、「絶対知」という概念が示す内容と根本的に異なるから、永遠で無辺際知を有する者と見做されない。次に「無限性」という概念は、梵の自然之性が万我物事象、その形態と時空の繫縛、制限や無常流転に引掛かっていたり、悪影響を受けたりする事なく、万有内の「一我一物」のような有限の存在ではないと示している。この梵こそ、匹儔なきで絶美極まりない徳力を本性とする事によって、一切有、その生滅と化育、あらゆる制限と繫縛を万遍なく浸徹しながら、いつも超越する存在である。一方、一切無常界の束縛と限界から解放された解脱我も、千差万別であって、無欠の幸福を会得していなかった時もあった以上、無極で無上の存在ではなく、有限であって、「無限の実有」として認める事は出来ない⁽⁵⁾…『「この梵は、至高の慶福を本有する存在である」^[Taittiriya Upanisād, III.6.1]という聖句は、梵の本然性質が無上の真智によって絶えず盈濡えいじゆされている世界であると明示する。又、「梵は真知と至福を本有する」^[Bṛhadāraṇyaka Upanisād, III.9.28]という句も、梵の無上至福が無辺際知を本来性質の根本要素とするという意味をもっている⁽⁶⁾。…『梵は、無生で無尽の実在性、無間断の偏在性、無礙の沁徹性、無辺際知、神秘的な靈妙性や永遠の慶福等の徳力を本有する万劫万有の究極的な本末である^[Mundaka Upanisād, I.1.5; Vishnu Purāṇa, VI.5-7]。』この大我は、一切の欠瑕、罪惡、年月の経過、死滅、悲嘆、渴望や欲求不満等の影もなく、自由で肆然自立的に実存し、全知をもって真理を行じながら無限の栄福を享樂する^[Chandogya Up. VII.1]。…『一切世の万我物事象の内我として実存し、唯一で絶対不変の本性を有する存在でありながら、宇宙万有の創造主たるブラーマ神、一切有の存養主ヴィシュヌ神および万我万物の究極的な冥福地シヴァ神（として活現する梵）に帰依し奉る^[Vishnu Purāṇa, I.1.2]。…『彼は、（顕然たる）身体や感覚を（本性として）有する事なく、彼を超越する存在がなければ、彼に等しい存在もない。知能、行動力と実現力を根本要素とする彼の無上能力が、自然で自発的に多種多様な活力として現成しながら、永遠を通じて露顯する。彼は、一切世界の諸々の支配者を超絶する最高で無比の主権者であって、万劫神祇の唯一無二の大御神である。彼こそ、万有の靈我の本末我（本末因）である。彼に「親」がいなければ、彼を超越する存在もない。彼は全知と永遠の自存自立力を本有する絶対無礙の主である^[Śvetāśvara Upanisād, VI.7.8, 9]。』彼は、一切劫界の万我物等を遍徹しながら養濡する究極の内我である。彼こそ、あらゆる罪惡から常に自由であって、ナーラヤナと称ぜられる神主である^[Subala Upanisād, VII.1]⁽⁷⁾。…『万主の主であって、一切有を沁徹しながら養活する絶対内制我であるイーシヴァラ神は、無上の妙格神であり、彼の意望が即座即刻で完全に実現される。…梵の本然性質の根本徳力（本然自内性、本然宝蔵界）は、一切の欠如、罪惡、不浄や無明の如きものの幽影もない無辺際知と永遠の慶福を主要素とする存在である。更に、無量で無比の善美德と神秘的な活現力を本然宝蔵界の相とする。この梵は、無量の劫波を通じて、万有万系の生成と化育、増減や進退等をせしめながら活現するが、それらの変化は梵の自内性にネガティブな影響を一切およぼさない。梵の本然自内性は、永遠に不変で無上の栄福を享樂する絶対不可得の世界である。…彼は現劫界の無常、迷悟の世界を彷徨う靈我や既に解脱した万我を本然身体ほんぜんしんたいの隱現的な真相としながら、悉有を業法に遵じて、慈愛をもって、恣に開闔したり、生死や増減等をさせたりする。…この梵は、一切劫界の原質料、原動力、一切有の実存の本元的な養濡力でありながら、万有安眠の究極的な目的地でもある。何故かと言うと、彼

こそは、無量世界とその万有千化の本末因であって内制我である一方、一切有とその変化も又、梵の身相でありながら、その存在と活現成の顕晦的な実体である。…彼は、ウパニシャドの中では、一切有の真我、超絶我、自存自立有、最高の君臨主、無量劫の本源神等の如き御名で呼ばれている。…この存在こそ「梵」である』⁽⁸⁾。

ラーマヌジャよりも、ヴェーンカタナータ以後の慧哲は、自存自立的な生命、無辺際智、無上の慶福、完全無欠性と無限性が、梵の絶妙極まりない性質の永遠で根本的な大徳であると一貫して唱えている⁽⁹⁾。

先ず、梵の自存自立的な生命（や「自存自立性」というもの）は、残りの四大徳を初め、一切有、その徳力とその世界を絶え間なく養活する太極的で神秘の極まりない大妙徳であって、梵の永存力である。換言すれば、この絶対的な実存力は、無性無徳差で生一本の唯一実在と見做すアドヴァイタ的な高次梵（Nirguna Brahman, Deus apersonalis）でなければ、不依で独立した徳力でもなく、無限で完全無欠の妙智と栄福を本然性質の根本とする梵（Saguna Brahman, Deus personalis）の無量徳力とその性能の永遠で絶妙の極まりない本来自然の徳力である。

次に、梵は、無辺際智、即ち、通徹的な悟知と無礙で無間断の自他認識を自然性質の根本妙徳として有する。この慧智は、梵界を初め、一切劫界の万我物事象、その万徳千化の諸相と様態のありのままを通徹しながら直観する不生不滅、不減不縮で不偏の無上妙知である。

第三の根本妙徳として無上大悟に満ちている梵の慶福が挙げられている。この慶福は、無辺際の知、無欠で無碍の明識と肆然意望の即座実現力に根差す梵の意識的な悟悦の直感である。更に、この至福は、梵身の一相である現劫界とその万我物の極楽や愛悦等を沁徹する半面、それらを永遠に超越する。一方、梵の慶福は、万我の活動や自業の自得たる苦悩、不幸、幸福の減縮や万我の解脱に無関心でなければ、その増減等に依存する事もない。

残りの二大徳、即ち、無限性と完全性は、梵の自存自立的な生命、慧智と慶福の「絶対性」の二相であって、上記の三大徳から切り離す事が出来ない妙徳である。では、梵の無限性とは、梵の本然自内性とその活現成が、一切劫を通じて、不生不滅であって無量で無尽の徳力を自然宝蔵界としながら、万世万界の我物事象、その変化や業報の因縁、繫縛、徳力とその性能の限界から永遠に自由である。梵の無欠完全性とは、梵の本然自性と自然身体の諸相を隙間なく^{えいいつ} 盈溢しながら養活する無礙の生命力、悟知と慶福を顕とする一切の善美德が、汚染・穢れ・欠瑕や邪悪等の影も一切ない、十全や全真等に満ちた充実性である。

要するに、ヴィシスタードヴァイタの「五大妙徳論」は、無限で無偏の慧智と無欠で無尽の慶福が、自力をもって存在する梵の本然性質を成す無量で絶妙極まりない善美德とその性能の根本妙徳であると主張する。この見解は、ヴィシスタードヴァイタが唱道する梵論の根本的な哲理であって、その神学の中心的な教理でもある。

二. 梵の自然大妙機を論述する「梵力五大妙機論」

ヴィシスタードヴァイタ・ヴェーダーンタ

梵我物峻別一如論学派によると、一切を絶する妙格的な精神、万有千化を活性化しながら超徹する大魂魄、および完全自立的で太極の実体（全面的に固定不活ではなく、絶美で絶妙の^{極まりない無定相の自性を本有する御命}）たる梵は、自分の身体を構成する万我物事象、その万徳と性能の活現、化育等の原動力因（*Causalis instrumentalis* ^{principalis}）、悉有万象の活動とあらゆる変化の絶対的な存養因であって太極的な活性力（*Causa vel potestas* ^{vitalizantis absoluta}）であり、万世万有の壊滅退化の維持力でありながら、その終末と安らぎの盈濡力でもある。一方、梵身は、その極妙無定相で大寂緩慢の様態において、一切世界とその我物事象の究極的な素材（原質量因、*Causa materialis* ^{fundamentalis}）であるが⁵、万有万象の死滅と一切変化の消去と閉闔によって、万世下界が⁶、開闔以前に酷似した極密幽玄で全面的に不活無対の様態に還帰し（*Terminus absolutus* ^{cosmizationis}）、次の成劫開始まで休息する。換言すれば、狭義の梵（一切存在の大魂魄）は、無量劫界とその我物事象等の本末因（AとΩ、阿吽）である。

本学派によると、永遠に自立的な存在力（*sat, sattva,* ^{sattvam}）、無限無偏の慧知（*jñāna,* ^{jñānam}）、無尽無碍の至福歓喜（*ānanda,* ^{ānandam}）、完全無欠性と不染汚性（*anala,* ^{amalatva}）と超徹的な無限性（*ananta,* ^{anantatva}）という五大徳は「梵」の本性性質を構成する根本要素（*svarupa, essentia* ^{naturae entis}）である。

① 梵の生命力の無極神秘を論ずる「絶対自力説」。

梵の本性性質を成す徳力の内、特に、永遠自立的な実在性（永遠無尽の生命力^{永遠無尽の存在力}）が、梵の性質の無上で窮極的な本元徳であって、他者によって全面的に体得されたり、知り尽されたりする事が出来ない無極の玄界であるとヒンズー教の神学者は主張する。ヴィシスタードヴァイタも同観であって、多数の聖典を引用しながら、完全で全面的に自立的な存在としての梵の役割を細論するが、ここで、斯した論辨の主旨を巧に明示するラーマヌジャの『ヴェーダーンタ諸聖典の論釈大全』（*THE VEDĀNTA-SŪTRAS WITH THE* ^{SRI BHĀṢYA OF RĀMAṆUJĀCĀRYA}）の重要な二・三箇所を紹介する。

『梵こそ、絶対眞実の存在（実存する御命、生^{命を自己とする者}）、無辺際^{の悟知}、無極の慶福、無瑕無欠の性質徳力と一切を超絶する無限性（を本然実相界とする存在）である〔*Taittiriya Upanisād Mundala Upa-* ^{nisād, II, 1.1, III, 6.1. I.1.5.}〕。愛する我が子等よ、一切有の太初（玄劫期）に「絶対の存在」のみが実存していた〔*Chāndogya Upanisād, VI.2.1.*〕。上文をラーマヌジャは下記の如く解釈する。…‘Sat’たる梵は、一切存在の根源的な質量因および動力因でありながら、無量の劫波を通じて宇宙万物に遍在し、万有万象を内制しながら君臨する不生不滅、自由自在、万能全智、無尽絶妙の善美徳を本性性質とする霊我（営魂）であって、万世の我物事象の太極的な存在である。…愛する我が子等よ、一切劫界の開闔以前に絶対存在（者）のみが単独に永存していた。この梵は、ある時に自からこう念じた。「吾れ、多我多物として生まれ、活現成しよう」。そして、宇宙万有の原始根元を創造した。…我が子等よ、生起しながら活現する一切の世界とその万有万象が、永存者たるこの「存在」を本源とし、慈養主としながら、この存在に全面的で必然的に依存するものである。この梵こそは、太極の存在であり、一切有の無上霊我である』

〔*Chāndogya Upanisād. VI.2.3,* ^{〔*Taittiriya Upanisād, 11.6.1.IV.2.3.*〕}〕⁽¹⁰⁾。

匹儔なき隠現の徳力を本然性質とする絶対的な存在たるこの梵が、一切劫界とその万我物事象の原動力因（存養因，養活因と）と同時に原質量因であるという教理について、ラーマヌジャは更にこう述べている。

『(我々の) 聖典とその諸註釈書 (Upanisāds) が教示する处によると、梵が自分を宇宙万有として現成し化育する故に、一切有の原質量でありながら原活力因（創世主であって万有の存養主）でもある。この梵は「吾れ、万我万物として生成しよう」と望んだ後、「彼は万有として現成した」[*Taittiriya Upaniśad*, II.6と7]と聖句は明確に記する。これは、梵が万世悉有の究極的な生み親であって、それらの諸活動の基盤と根原的な材料であるという意味を示す（表現である）。よって、梵は活現成しながら自分の妙身を宇宙万有として化育し、展開せられている。換言すれば、(狭義の) 梵のみが一切有の本元的な活力因であって、幽玄で極微の梵身が万有の原質量因であると教示されている。宇宙開闢以前の梵身とその絶対不可得心（梵心）の様態を万有千化の因位（至極因位に住ずる梵身）である。ところが、梵は、自身の大寂無対の状態を自力で打開し、開闢万化し始めて以来、現世の万我物事象として今日まで活現成し続けている。これは梵（の活動とその顕現）の果位である。要するに、梵が現世万有として活現成し、（梵身の麁相である）この宇宙万物の本来質量であって、究極の創造主と普遍養濡力でもある。この見解は、万有理法と正論法に適う教説である』⁽¹¹⁾。

斯くて、ラーマヌジャを初め、現代のヴィシスタードヴァイティンも、「絶対無尽の存在力」や「絶妙極まりない生命力」を一切世界、その万我物事象と万徳形態の有常と無常相の窮極的な立脚地およびその実存の本末因として理解する。この「存命」^(永存力を本然性・質とする生命)こそ、万世万有の匹儔なき靈我や絶対絶妙の自立実体と称せられる狭義梵の本来自内性の根本大徳とその妙機である。この梵力は、一切の我物事象の存没万化をあらしめ、活性化し、養濡する原動力因であって、梵と万有森羅の依存諸相の存養力でもある。更に又、梵と宇宙万有の因果的な依存関係も、梵身たる一切世界における梵（一切有の極密心）の完全自由な活現によって必然的に生じる連結として見做されている。

② 宇宙開闢以前の梵の妙態を論ずる「梵力静養説」。

ヴィシスタードヴァイタによると、万世千界とその万我物事象の顕密諸相およびその因果的な活現成の経過においては、大別して、絶対太極因たる梵の四つの実存様態（実存の過程、実存の経位）、梵特異の活現の性能と実現様相の四段階（四位即四段又は、四段即四態）が識別出来る。よって、一切存在の実存とその活現成の経歴を区切っている「四位」とは、第一、梵我物事象（狭義の梵とその身相、又は、広義梵の心身の二相一如の世界）の「幽玄大寂位」（即ち、玄劫期や空劫期・*pralaya, inertia pre vel post-cosmogonica*）。第二、梵と宇宙万有の因果的な活現成の「生成主導型の化育位」（即ち、成劫期・*pralaya→prapañca, śamśara, sarga, cosmizatio universalis*）。第三、梵心身の因果縁起的な活現成の「減縮主導型の化育位」（即ち、還劫期や壊劫期・*prapañca→pralaya, de-cosmizatio universalis*）。そして第四に、空成壊劫の三期を沁徹しながら超越し、通和しながら透脱する狭義梵の絶対卓越的な秘蔵界、永遠の不可得性と絶妙極まりない自存自立的な「活現成の永遠盈溢位」（即ち、梵の無尽無極で不可得的な自内性の生命神秘）の事である。

「極密幽玄の位」⁽¹²⁾とは、梵我物とその徳力実態の玄劫期、又は空劫期である。その時期に、一切有の本末心である狭義の梵は、本来幽玄、靈妙で神聖の極まりない生命本力、匹儔なき善美徳の無尽蔵と肆然自立で極秘の活現成とその無限能所を本然自性としながら永遠に実存する。同時に、梵身界の天然で隠現的な諸相は、玄（空）劫期においても、狭義の梵に依存しながら、極めて幽微、精妙、無定相と完全静寂を自性の実態とし、梵力の妙用によって、全面的に不活緩慢の様態で存養されていた。よって、絶対太寂で不活緩慢の状態とは、狭義の梵とその本来身の絶無、同時有無、同時虚実、無性や無自性、完全無相や無自性の渾沌、もしくは虚構的な化現や虚幻でなければ、全面的に徹底した無為、不動、無機無力、完全不能や単一純然たる生一本の実在でもない。更に、ヴィシスタードヴァイタによると、当時、狭義梵の他に悟知的な我物が活現せず、梵身においても、精神界と物質界の間や現象的な区別差異も全くなく、虚無に近い寂滅無対に住じた万物の極微原質量と万我精祲^{しん}の未開で無定相の原胚（金卵形成以前の状態）しか実存していなかった。一方、玄劫期（梵身本来の^{梵身本来の大寂緩慢期}）であろうと、成劫期、還劫期や空劫期（次回の開闢以前の^{梵身の開闢以前の大寂緩慢期}）であろうと、本来不依で自立的な狭義梵の自存力の妙機（梵の生命力）のみが、一瞬も途絶えたり休息したり、又は、衰弱したりする事なく、絶対無礙で不可得な生命力として、無間断に自己存養的な活現成を行ずる。梵力の斯くした妙機こそは、一切の劫波^{カルパ}と万有徳力の本末因縁（原動力因、存養力因と通総力因）である。逆に、この自己養濡的な活現は、一瞬でも断絶したら、狭義の梵だけではなく、広義の梵たる一切劫界も即時に必然的に絶滅する（梵我物事象等が非実在・ゼロに転ずる「転梵入無」,「転梵成無」）。更に、梵身の無分別一如的な妙態という在り方は、梵自体とその身体、まして、万我物間の天然的な無異同一、特に、梵我物の性質徳力の本来で全面的な生一本性を示現する（という意味）のではない。この無分別一如や幽玄大寂と称ぜられる様態（在位）に住ずる梵身とそれをせしめる梵心、更に、梵、万我の未開原胚と原質量は、本然自性（梵を梵、靈我を靈我として、物質を物質あらしめる徳力）を永遠を通じて異にする。この本質的な差異は、虚無化したり虚幻化したり、又は、虚実に転じたりする事がない。ただ、梵身の静寂緩慢の時に、狭義の梵が、一切の現象的な活動を肆然に控まる所為で、梵の他に悟知の能所ある完成した靈我もなく、梵身の超現象的な構成要素とその差異も現世心眼によって直接に感知する方法もないため、梵我物の差異がないという謬見は生じる。しかし、精妙を極める梵身の精神のおよび物質的な混淪一如態でさえ、活現と開闢万化の能力を潜匿するが、その幽玄的な能所自体も、狭義梵の妙機によって梵身形而上界（非現象界）の一層として存養され、絶え間なく盈濡^{えいじゆ}されている。こうして、極微で幽秘の状態に住ずる梵身は、狭義梵の本然実質たる実存（生命）に参ずる世界である。そして、梵身の精妙で大寂緩慢の位は、一切世界とその我物事象の質量的な原蔵であって、本来の発生地である。一方、狭義梵、特に梵の自存自立力、無上栄福で溢れ出る生命力とその妙機は、梵身実存とその無量様態の太極的な養活因として位置付けられている。

要するに、狭義梵の自己とその妙身を存養し（pananimatio）、万遍なく内制しながら通和（pancratio）する神秘極まりない生命の妙機が、万我物の絶妙で幽玄大寂の位においても絶滅する事がなければ、一瞬も休止する事がないという見解は、ヴィシスタードヴァイタが提唱する梵観の根本教理の一つであって、通論である。

③ 梵の創造的、存養的と君臨的な活現成を論ずる「梵力三大行説」。

梵身の極微幽玄で全面的に不活緩慢の玄劫（空劫）期が終末を迎え、その閉闔と共に梵の肆然で無償の寵愛によって本来身の妙蔵界に変化が生じ、梵我物の顕然たる活現成の時期が訪れる。そして、狭義梵の完全に自由で利他的な恵愛の念によって開始された梵身の顕密的な活現成において、開閉、膨縮、生死病苦、増減、迷悟、善悪、美醜や争和等の勢力能所は親交し、指導の主副を分ち合ったり、交替したりする最中に、活現成の天然的な展開の順逆、進退、拡張、精粗、動静、内公、陰陽と靈物等の位を競行する。創世の意旨を出発点とする梵力（梵の生命）の遠心的（生成化育と精進の）勢力は先頭で優位に立ち、開始された梵我物の顕然たる活現成とその経営流向において、主導権を握ったままで、当時の梵身妙界を構成する万我の幽玄で極微大寂の原胚と原物質の潜能潜徳を活性化しながら、全現実の多様多元化、個別化、分別化、膨張、増大、進歩、開放と転迷開悟の形而上下的な発展、充実と完成をせしめる。それは、梵我物の遠心的な活現成の優位、生成化育主導型のコスモス化であって、万我物事象界の成劫期（開華の絶頂）と称ぜられる。

一方、宇宙万有の全面的な隆盛の絶頂と膨縮生滅の均衡を境に、宇宙全体における支配権の交替が行われ、梵力の求心的（壊滅的）な勢力は優位に立ち、主導権を取る事によって、万我物事象等の発達向上にブレーキがかけられ、開闔、起滅、増減、迷悟、善悪や争和等の均衡が徐々に崩れていく。その結果として開闔より閉闔、生成化育より死滅、増大と精進より減小と退化、そして、活現成の拡大と徹底化より、その解体、縮小と鎮静化の勢力は、一切世界とその万我物事象を、開闔以前の如き極微精妙で大寂緩慢の状態へ誘導しながら操縦する。これは、梵我物の求心的な活現成の優位であって、還元（解体的、壊滅的）の活現主導型のコスモス化、又は、万我物事象の壊劫期（華満開の散乱）と呼ばれる。よって、梵我物の顕然たる活現成の位とは、梵生命の妙機による梵身の全面不活で極微精妙な状態の開翦でありながら、梵力の露顯的な活現成の開始（創世・creatio mundorum）、万我物事象とその万徳形態の千差万別的な多様化と、梵力の生成化育的な勢力を至極の基盤と本源とする存養的、沁徹的、内制のおよび通和的な活動（成劫期・cosmizatio universalis）、そして、一切有の生成的で向上的な発展の減縮、梵力の創造的で養濡的な活動の鎮静化および、梵力の解体的な勢力の主導による万我物事象の微細化と隠静化（還劫期・decosmizatio universalis）の事である。

ヴィシスタードヴァイタによると、測り知れない悟悦の栄福を享受している梵は、永遠無尽の神明において、ある時に、幽玄極微で未開の妙身を万我物事象の世界として現成させる事の意味・神旨を自由かつ積極的に、下記の如く表示した。

『吾れ、無量の存在となつて、有常の万我と無常の万物として生成化育しよう（*Taittiriya Upaniṣad*, II, 6.1.）。…そして、宇宙万物の発現、変化の千差万別と梵力の遍満沁徹的な存養にも拘らず、万世悉有の本来自性心たる梵自体には望ましくない影響が一つもない』⁽¹³⁾。

『吾れ、前成劫期と同様に今回も、多名多形の有情と無情から成り立つ世界を我が現身として発成させようか』⁽¹⁴⁾。

『極小の欠瑕や罪惡の影でさえ永離し、真理だけを思意しながら万善を成し遂げる万能を初め、匹儔なき無尽無礙の徳力を本然性質とし、一切の太極因縁である（狭義の）梵は自ら「吾れ、万有として現成しよう」と意望した。そして、梵は、地・水・火等を構成大素とする万世万有とその關係を梵法（梵の本然理法）に遵じて創造した。更に、宇宙万有の最高存在である神祇を創造した。万有の営魂となるために（極密幽玄の様態に住じた）万我（の原胚）が活性化され、業報道理に遵じて、前世の自業に適した原質量と結合する事によってそれを自身とする。この梵こそ、万我の自内性を決定し、その内制我となった。更に、梵は、神祇を初め、万世万有とその千差万別をあらしめる本末因である』⁽¹⁵⁾。

『万我に内住する梵は万我の内我であって、万我を自らの身体とするにも拘らず、万我は彼に気付かない。しかし、彼は一切の個我（神を神、人を人、…植物を植物ならしめるモノ）を永遠に君臨する。彼こそ、汝（と万我物）の永遠の内制我であって、不滅の大我（大営魂）である。（大地…水…火等同上）〔*Madyandina Brhadāranya-*〕⁽¹⁶⁾
ka Upanisād, III, 7.3

『（一切存在の大魂魄である狭義梵が本有する身体において二面・二層が見わけられる。）下位身とも呼ばれる梵身の下位層が本来無機非情の原質量から構成されているが上位身とも名づけられている梵身の上位層が悟智を本然性質とする万我から成り立っている。上位身たる万我の悉くが営魂として下記身たる原物質と結合する事によって、それに生命と活力を授け、活性化せしめながら原物質の現成とその形態を決定し、諸活動を維持する。「我が身の上下層は、各選劫末に極微幽玄で不活緩慢の妙態たる空劫期に融没するが、新成劫期の太初（4,320,000,000年間置き）に再び吾れは我が身の開闢、活現と万化をせしめる。…吾れと我が身の精神のおよび物質的な面共に不生不滅の真相である」と知るべき。…玄（空）劫期における梵身の性質徳力こそ宇宙万有の胎蔵界である。そこに、^{グラーマーンダ}「原始金卵」と称ぜられる万我の極微妙胚が据えられる。それこそ、一切劫界の万我物事象とその万変千化の究極本地（本末的な素材）である』⁽¹⁷⁾。

一切有の無極自内心たる梵の「吾れ、無量の存在となって、万我万物として活現成しよう」という神旨は、万我物創造の開始とその活現成の養濡を意味する。神意の表示と共に、自存自立有たる梵は、本然性質とその万理に法って自由な寵愛の故に、自らの妙機に因って梵身の大寂緩慢の状態を終結させ、宇宙の開闢、万我物の生成と没滅等が開始される。先ず梵は、全面的に不活緩慢で未現無自相の原質量（*prakṛti*）の中に極微幽玄で無定相の万我原胚（*brahmāṇḍa, hiraṇyagarbha*）を興し、活性化しながらその精神力と活現力を増強する。更に、梵力は、大寂緩慢の状態に住じた梵身の物質的な原素材（*prakṛti, upādāna kāraṇa*）を刺激し、膨張、分割、融合、転変等をせしめる。それと同時に、活性化されて行く万我の前世自業（特に為し遂げた善惡の果報）に循じた物質の種と結合をさせる事に因って、無量劫界に及ぶ生死、増減、混合等の複雑な変化を行ずる。要するに、万我物事象、その万徳千力およびあらゆる実存形態と変化を意味する一切劫界は、自らの隠然自内心である狭義の梵を太極の動力因としながら、梵身の絶妙で大寂緩慢の形態に至極の質量因とする。換言すれば、現存する宇宙万有を初め、一切劫界の我物事象とその徳力万化は、玄劫期に住じた梵身（の精神層をなす「万我の極密金卵」と物質層の素材なる「妙相の原質量」の）

実存、と同時に、その本然自内性（又は、超微靈我や絶対大魂魄等）と称ぜられる狭義梵の永遠活現成の異なる様態に過ぎないとヴィシスタードヴァイタ学派は主張する⁽¹⁸⁾。

梵心の中で生じた創世的な意趣と梵身の万我原胚内の初変化と共に始まった一切世界の自然発展は、複雑に絡み合って共存する生死輪廻、起滅の流転、膨縮の進退、凝融混和や隠顯的な有常と無常の世界であって、梵から切り離す事が出来ない多種複流的な梵行（梵の活現成）である。梵我物の顕晦的な活現成の峻別不離で絡み合う二つの主流とは、一方、開闢、生成、膨張や増殖等を主導力とする活現成、他方、それに逆流するように見受けられる閉闢、解体、死滅や減縮等を主導力とする活現成である。更に、万我物の生成化育的な発展を主導する活力と万我物の解体縮減を主導する力は、排他的でなければ共存し得ないのでもなく、狭義梵の無尽無極の本力を本末（本源・活性力と帰処）とする峻別不離で異性同質的な勢力である。一方、この両力活動の均等不均等は、梵身の様態である宇宙万有の運命とその経過段階を決定する。斯くて、梵力の遠心的な妙機を第一能動因とする生成化育力が優位で主流として一切世界とその万変千化を主宰する間に、梵力の求心的な妙用を太極因とする解滅的な勢力は副流として次第に増強して行く。両力の影響が均等に達するまでは、梵力の創世的（pancreatio）および存養的（pananimatio、一切有を沁徹しながら活性化し、無間断に養濡しながら護持する）な活現成の隆盛期であって、万我物事象の大盛栄の時節でもある。一切有のこの様態と発達経過を「成劫期」と呼ぶ。

やがて、梵力の遠心的な妙用を発生地とする万我物の進化力と、梵力の求心的な妙用を本源とする万我物の縮減力は、顕密にして形而上下的な活現成の均衡時点を境に、万世千界における開闢、生死、融解や進退等の万変千化の均衡が崩壊し、一切存在の主宰力の交替も自発的に行われる。これに因って、狭義梵以外の万有とその変化の世界においては、生成化育的な発展が徐々に減縮しながら副流と展開しているが、解滅力は次第に影響を拡大しながら万有千化の主勢力として、その発展と経過を統括する。それは、梵力の全機現ではなく、創世的な活躍の鎮静化と隠静化の時期であるが、一切有を通総しながら存養し、更に、無間断で内外的に万有を君臨（pancratio）する梵力の本来性において減縮や壊滅のカゲでさえ認められ得ない。この様態を宇宙万物の「還劫期」であって、天地万有の開闢以前に酷似した極微幽玄で全面的に不活緩慢の状態を究極目的とする一切有の発展である。

結局、梵力の求心的な妙機の主導を拠り所とする一切劫界とその万我物の形而上下的な幽玄化、微細化と活現の鎮静化は、万有世界の絶無化でなければ、虚実化や虚現化でもなく、狭義梵の神秘極まりない生命力によって養濡されながら絶まず護持される梵身の非現象的で大寂緩慢の様態（「空劫期」）である。その時期中に万我物の活現成が全面的に停止するが梵力の活現成自体は、その本性において変化が一切なく、隠静化するのみである。斯くて、狭義の梵は、その妙身の真相において万我物を享受する究極の秘蔵界（究極の目的地・至極の泰界・finis ultimus universalis）である。

④ 創世の究極目的と梵の無極悦楽を論ずる「無償恵愛説」。

無限で無尽の徳力能所を本性性質としながら完全無欠で不足の気配さえない永遠の慶福を享樂する梵は、何時でも、何処でも…何でも好き（しかし勝手我儘で無責任という意味の行動ではなく）のように

創造したり、起滅変化をさせたりする事が出来るのは当然である。一方、一切の善智と無限の栄福等で
 盈ち溢れる梵は、内外的な必然性や万行の普遍原理たる「業法」的な必要性も全くなく、自ら自由に創
 世等の如き顕然たる活現成を意思した（「吾れ、多者多物として活現しよう」(*Taittiriya Upanisād* II.6.1, *Chandogya*),
Upanisād, IV, 2.3
 以来、一貫して忠実に自旨を実現しながら達成しようとする究極的な目的 (*prayojana, finis*
ultimus cosmizationis ・宇宙万有の
 開闢等の輪廻の至極目的) とは、一体何であろうか。はっきりしているのは、万我物等が出現してもし
 なくても、梵自体又はその慶福享樂の本性に損益や増減等の如き変化が一切ないという事である。

ラーマヌジャを初め、ヴィシスタードヴァイタの哲人は、万世とその万我物の創造、無間断の存養
 と各大劫末の隠静化の究極目的を全面的に自由な意旨、無償得で利他的な恵愛より生じる自現的な創造
 (梵行) の無極悦樂 (*līlayā-rasa, dilectio Divina in*
creatione automanifestativa) と同時に万我の完全な解脱 (*mokṣa*) であると観ている⁽¹⁹⁾。
 この「*līlayā-rasa*」(*līlā-eva-kevalā*
 リーラヤー・ラサ 文は、単に *līlā*) という語は、「純粹な遊戯」と直訳される事もあるが、梵が楽しんでい
 る「遊び」とは決して、二十世紀の放埒した政商界に流行している公正、人権や正見等の利他的な正道
 を踏み殺す私利私慾主義的な行動でなければ、無因縁や何の目的もなく偶発した遊戯とそこに生まれる
 快樂でもない。この遊び（とその時に生ずる慶福と悦樂）は、無極の慶福を永遠に享樂する梵の生命と
 その徳力、特に自由意志と創作力の分ち合い、天然性質とその理法に導する万我物の諸活現とその成果
 および、梵の無償寵愛を本源とする万我救済、その通常の道と特別な顕現 (*avatara, divinae*
manifestationi ・化身、権化等)
 という梵の形而上的な公現から生じる梵の大悦樂（慶福極まりない悟悦）である。更に、梵の自現的
 な創世、その無間断の存養と特別な顕現から生じる梵の無尽極樂、梵我物一如界法（*狭義梵とその*
全身界の理法）に循
 ずる万我物の生成化育と死滅万化に伴う苦樂、および、万劫の壊滅後に予定されている万我の自己完成
 (完全な解脱、至福歎慕、梵と万我の悟明的な合一) は、梵が設定した創世等の目的の表裏であって、
 梵行を本末とする梵我物活現成の異なる側面である。斯くして、創世とその複雑な化育から生じる梵の
 自己悦樂と栄福 (*ātma-tripta,*
sva-artha) と他者死後の至福歎慕 (*para-tripta,*
para-artha) は、調和的に両立しながら、梵我物の存
 在的な依拠、絆とその究極的な目的性の本来合流的な性質を示現する。

一方、梵の本来肆然自力的な活現成には、主として次の二層が識別されている。一つは、分別知をもつ
 て把握出来る現世万我物事象とその万徳変化の世界、言い換えれば、梵力による梵身の多種多様な現成
 とそれに伴う梵の自己悦樂の世界 (*līlā-vibhūti, automani-*
festatio dilectiva cosmica) であって、梵の至福栄光の三分の一を示現する
 世界である。も一つは、現世的な悟知で僅かしか垣間見る事が出来ない梵の無極靈秘で絶美の自内心の
 悦樂と栄福の極まりない自立的な活現の世界 (*nitya-vibhūti, activitas*
aeternamente misteriosa) であって、梵の至福栄光の三分の二を
 しめると言われている。更に、梵の自内心的な活現とその栄福は、一切の面において不生不滅にして無
 極無限の神秘と至福歎慕の世界である。一方、梵身の活現成とそれに伴う梵の慶福は、梵の肆然意望を
 出発とし、梵心身（広義の梵）の本然行法に導する梵力全機現の一相一面であるが、斯くした梵行と有
 限的な悦樂は、梵の本然性質、特にその神秘と靈妙の極まりない梵心（狭義梵）の秘蔵界とその無限永
 福に一切の悪影響を及ぼさない。宇宙万有の創造とその諸活動に伴う幸福と歎喜は、梵心の無限無極で
 超徹的な活動と至福歎慕を本末とし、その妙行、至福と永遠に超徹的な通総を一瞬一寸も離れる事が出
 来ない梵心身の徳力能所の有限的な顕現である。ラーマヌジャ神学の権威である米国の神学者カルマ
 ン・J.B.は、創世の目的と梵の自現的な意旨について紹介する多数の文を下記の如く抜萃する。

『梵の創世的な活動は、梵の「遊び」(*sua-
artha*) であると同時に利他 (*para-
artha*) を目的とする。しかし、その活動は、梵が未だ有しない何かを得る為に行われるという意味ではない。…梵が一切の肆然意思を即今で無間に実現する「本来完全に自己満足する者」(*ātma-
tripta*) である。だから、活動と自己満足(悦楽)を、目的とする活動をしないという断見は根拠がない。…一方、万我万物は、梵行の目的ではなく梵行とその悦楽の方便(土具)と材料である。…斯くて、創世は、先ず第一に利他の為ではなく、万我物事象とその万変千化という(梵身の実存)様態を通じて、梵が享樂する永遠幸福の肆然で自発的、自現的な自己満足を第一の目的とする梵行である。…創世が万我物の真利に反する梵の不公平で残虐な行為であると誰もが不平不満を言う事は出来ない。何故かと言うと、梵は、個々の我を、その前生業に適した身体と(因果縁起法の業法に順じて)結合させるからである。それによって、梵の創造がある意味(面)で限定されるが、これも又ある意味では、梵の創世的な「遊び」が無目的、無秩序で混迷した偶然の出来事ではない事を示現する行為である。…更に、梵の多種多様な権化や化身(*avā-
tāras*)も梵の自由な意旨による創造的な「遊び」の一種であるが、彼等は「世を救う為」(万我の究極目的が達成される為)、時と場の必要に応ずる特別な手段である』⁽²⁰⁾。

更に、万我にとって、究極の目的である万我の梵との神秘的な合一の会得も、創世的な行動(梵の顯然たる公現と活動)の主旨に含まれていると云う事をラーマヌジャは、バガヴァッド・ギーターの注釈書で、下記の如く明示する。

『万我に適した身体と結合させる事は、梵が好んでする寵愛の行である。何故かと言うと、万我は現象界での活現を通じてのみ、存在の樂みを味い、永遠の至福を会得出来るからである。…創世開始の時に無比無上の主ナーラーヤナは、未開の原物質との縫れおよび無名で無定相の存在として、梵内に潜在していた万我が活現出来ず、自己完成(完全な解脱)とう万我の天然目的達成の見込みもなく、非知覚界のみに適したモノであったと御覧になった。そして、無償の慈愛に動かされたナーラーヤナは、万我を活性化させ、出現させながら、存在の目的である完全な解脱と他の目標を達成する為に、梵、神祇と人間の親交の方便である儀礼を設定した。…物質も万我が苦樂の体験をするためだけではなく、万我の完全な解脱を得るための土具である』⁽²¹⁾。

又、異なる観点から見ると、一切の存在は梵身であり、梵の栄光と無限無尽の君臨を現成する世界であるとラーマヌジャは述べている。

『一切の有は、その生成、存続と活動において私、梵に依拠する』<sup>[Bhagavad
Gītā, x, 7]</sup> という文を「下位の被造物を超絶する万神、更に、あらゆる神祇を遙かに越える最高の君臨主たる梵のみは、万世万有を隙間なく遍徹し、内制しながら通総する。この梵だけは自らの本性とその徳力を無量に普現する事が出来る。この普現は同時に宇宙万有の君臨を意味する。…無限慈愛の主(Bhagavan)は、究極的な真我として一切有に内在しながら万有を内制する。…無上の妙格神であるこのバーガヴァンは、欠如、不浄や罪惡と全く無縁であって、匹儔なき徳力を本然性質とする存在である』⁽²²⁾とヴィ

シスタードヴァイタは主張する。

三. ヴィシスタードヴァイタの「大行梵説」と「万有有限説」

① 絶対不二一元論的な「無明説」とその批判の要点。

絶対不二一元論学派によると、「無明」⁽²³⁾とは、本来、無性無徳差で単一純然たる存在（梵）、万我、万物事象、万変千化と多種多様な徳力の世界として虚構しながら化現する虚実的な活現力である。無明の本性性質において、下記の二層（次元）が識別される。

- 一. 絶対で生一本の真実を蔽掩し、それを梵我物事象等として虚構する^{ふんしん} 氣祿力（真実を万遍なく蔽塞する虚実的な力、^{'māyā', potestas obscurantis}）
- 二. 虚現界の一員である万我、特にその虚幻的な機能（感知）による絶対的な真実の虚偽的な把握（^{avidyā, nescientia}）。

この無明は、上位梵の本性的な要素でなければ、持ち前の属性でもなく、上位梵の単一で純然たる実在の無性無徳差の世界、その緩慢無為の大寂と無対無分別の真相を隠蔽し、一切劫界の万我物事象を上位梵に依拠する実有の世界として示現しながら、上位梵を世界を隔絶した本末因として見せかけ、本来無生で^き欺惑的な機能を有する虚実の^{ふんえん} 氣^{らん}力・活現力（^{māyā-avidyā, potestas obscurantis enigmatica et universalis}）として把えられている。無明の虚実性とは、無明が実有でなければ絶無でもない、固定した普遍の実体でなければ非実体でもない、虚幻でなければ単なる幻覚でもなく、同時に、有と無、有常と無常、精神と物質の特徴を本有する極めて謎めいた存在である。一方、その虚構的な性格は自明の事理であると言われる。それは何かというと、本来無性、無自相、無徳差で生一本の存在をして活現する梵、万我、万物と現象として区別し、各々が本性を異にする別々の世界であると把える無明の虚偽的な^{よう} 託^{たく}氣力である。更に、万我物事象を梵に依存する実在、精神と物質を本然で永遠に異性的な世界であるかのように見せかけ、万劫万有の非実在性、無自性、全面的な無常性等を、^{へいかい} 蔽^{へい}晦^{かい}する無明の本来自然で隠蔽的な活現力（機能）である。一方、人我を初め、宇宙の万我は無明の不思議な容態とその働きを常に体験するが、無明の虚構的な活動によって各々の靈我自体も現象界の一員として成立する^{せい} 所^{じょ}為で、無明の虚実のおよび虚幻的な機能に気付かないだけではなく、無明が一切真相を蔽掩する事によって、感知的な有常や無常を誤って、実存する多種多様な真偽、正邪や善悪の世界として把握する。しかし、無明の活現の結果である一切劫界の我物事象等を絶対不二一元論の心眼、即ち、無分別知をもって通徹すれば、無明による真理の蔽い隠しと感知的な歪曲が解除されるとアドヴァイタの哲人は一貫して主張する。そして、無明の解消こそ、万我虚現の究極目的であって、解脱の境地（mokṣa）そのものと見做されている。

絶対不二一元論が唱える無明説も、当学派の梵論（高次梵・上位梵）と宇宙論（低次梵や下位梵を初めとする万世万有）と深く絡み合う事は明らかである。アドヴァイタの梵論における「唯一実在説」、「唯一実体説」や「無性無徳差説」、宇宙論における「万有虚実説」と「因果虚現説」、更に、当学派と幾つかの接点を持つ仏教系のヴァイバーシカ派の「一切無我説」と「一切無常利那説」、そして、ヴィシスタードヴァイタによる上説の批判要点および自説の主旨を既に紹介した⁽²⁴⁾。

アドワイタの「無明論」に対するヴィシスタードヴァイタの批評を述べる前に、無明の中身と何らか

の関連を持ち、又、その側面を無明自体と誤って同一視されている様態や概念意味の根本的な相違をヴィシスタードヴァイタの最高権威であるラーマヌジャとヴェーンカタナータの見地に立って指摘する⁽²⁵⁾。

「絶無」と無明。全き非存在である「絶無」(tuccha)は、一切の対立、反対や对待等を除外するので、当然、絶無を掩蔽したり虚構したりする存在がなければ、絶無が虚現したり起滅させたりする存在も有り得ない。更に、絶無は、同時虚実でなければ、同時虚実的なモノゴトも生ずる事が永遠にない。よって、絶無は無明でなければ、無明の本末因等もあり得ないという事は明らかである。絶無(完全で全面的なゼロ)は実存しないからである。

「虚実」・「有無」と無明。「実有であると同時に同次元において「絶無」であり、又は、「有」でなければ「絶無」でもないという第三者たる「同時有無」は、存在の次元においても、論理の面においても両立不可能な事柄であるから実存し得ない。更に、「真実」や「実物」でなければ、同次元において「虚廓」や「空虚」でもなく、又は、「真理」でなければ、同次元において「虚偽」でもないという第三者的な「同時虚実」の如き世界(śaolasai-vi-laksanatvam)は、お互いに排除し合うから実存し得ない。荒誕無稽(けい)の概念に過ぎない。

「有常」、「無常」と無明。唯一で隔絶的な生一本の実在たる上位梵自体(Brahman ut est in se)は永遠にして全面的に不変の実体であって、無明の影響が一切受ける事はない。ところが、無明の虚実的な自然とその虚偽的な機能は、上位梵を無量世界の万我物事象として現成せられるだけではなく、梵の真相を虚現するとアドヴァイタは観ている。しかし、上位梵が永遠有常にして無対無為の実体であるのに対して、一切世界の万我物事象は絶えず変化をするから虚無であり、又は虚実や虚構的な世界であるというアドヴァイタの論理は、万代万人の存在的な経験を無視し、その常識と論法に悖る見解である。一方、ヴィシスタードヴァイタによると、有常も無常もお互いに排除し合うのではなく、実存する梵と万我物の異なる次元や真相の存在様態であって、同時に共存する属性である。有常だから無明と無縁であるが、無常だから無明の制約を受けて虚無や虚幻に変成したり、虚実化したりするという事は言えない。更に、無明と無常は同体異名でなければ、必然的に一体をなす不離のものでもなく、万我物事象の天然的な有限性の一面であるとヴィシスタードヴァイタは主張する。

「知識」と無明。絶対不二一元論によると、人我とその機能である感覚、意識や知識等は、無常界に属する以上、当然、無明の虚偽的で虚構的な化現である(svātyantābhāva-samānādhi-karanatayā pratyamātvam)。この条理も人類の存在的な経験に反するものである。更に、この論理に遵じて考えると、あらゆる知識の真偽、論法の正邪とその上に立つ現代の文化と文明の実在性と信用性等は単なる虚構であって、価値のない空言に過ぎないと認めざるを得ない。

今度は、アドヴァイタの無明論に対するヴィシスタードヴァイタによる批判を四項目に絞って、その

主旨を説明する⁽²⁶⁾。

先ず、無明の「本源」(aśrayānupapatti) のことである。アドヴァイタによると、虚実的な無明は、本来大寂無為で無性無徳差の上位梵自体を絶対に蔽^{へいそく}する事が無いが、その「虚現」なる一切世界の万我物事象をあらゆる次元において必然的に掩蔽^{えんぺい}する。しかし、ヴィシスタードヴァイタによると、無明の本源と本地を説くアドヴァイタの立場は非常に曖昧であって、矛盾する面が多く見られる。ヴィシスタードヴァイタの反論は、無明自体の同時虚実性、その活動の虚偽性と虚構性の、上位梵との関わりに集中している。

先ず、上位梵のみが唯一無二の實在と認めるなら、万劫万有と無明が、虚実的な存在ではなく、実存しないと認めざるを得ない！次に、アドヴァイタ的な無明を上位梵自顕の「自縛力」として認めるなら、上位梵を大寂無為で無性無徳差の存在として認める事に無理がある。そして、無明を本地とする万有万象の善悪、美醜、迷悟や様々な欠瑕も当然に上位梵と切り離す事も出来ない。一方、アドヴァイタによる上位梵が一切世界を永遠に隔絶する無性無徳差の實在である。更に、もし、アドヴァイタが主張するように、上位梵が本来全面的に不活緩慢の實在であると認めるならば、梵の自顕、自らの活現成、字形、無明の虚実性とその活力の虚偽性をば、上位梵と全く無縁であると認めざるを得ない。又もし、アドヴァイタが主張するように、上位梵が真実の存在であると認めるなら、少くとも、上位梵の自存自立的な自内活動（梵を梵たらしめる本力・生命力）を認めざるを得ないし、上位梵のどんな活現であっても、その結果は、絶対に「虚無」や「同時虚実」になる事がなければ、自らを虚偽的に現成したり虚構したりする理由も全く見当たらないとヴィシスタードヴァイタ・ヴェーダーンタは観ている。最後に、宇宙万有を無明の本源として認める事も出来ない。何故かという、アドヴァイタによると、宇宙万有自体が無明の虚構的な活動による上位梵の虚現であって、梵の超絶的な真相の泡影的な化現として見做されているからである。

第二に、無明の本然実相界 (savarūpanupatti) の問題である。アドヴァイタ的な無明は、永遠無生にして非実体的虚実性を自然真相とし、その氣稜^{きりん}的な機能が上位梵の大寂緩慢的な無性無徳差を蔽掩しながら虚実的な万我物事象として化現する。更に、無明のこうした氣稜力は、虚構せられる字形（宇宙万有）を内外的に限制し、その諸活現を束縛しながら汚染する普現的な悪力でもある。しかし、ヴィシスタードヴァイタは、無明の同時有無的な性質、隠蔽的、虚構的や詐善的な活現力および出現した宇宙万有の虚実的、幻影的や虚偽的な性質が、存在の理法（実存の原理）、人類の存在的な経験とそれに基づく普遍論法および上位梵のアドヴァイタ的な理解にも乖^{へん}るから実存し得ない世界と見做し^{せんぼく}舛駁論として斥ける。

先ず、存在と絶無、実存する事と同時に実存しない事、存在でなければ絶無でもないという第三者は、その中身において、相反するだけではなく、お互いに排除し合って同時に両立不可能な構成要素と性能を本有とする以上、当然実存しない世界 (anirvacanīyān⁻tvānupapatti) である。次に、アドヴァイタが解^かく無明の「虚実的」な性質という概念も、万代万人の経験、把握と検証の範囲外にあって、精覈^{かく}な論法にも反するから、謬見として擯斥する。更に、上位の梵が非個我的な唯一無対の實在であるとすれば、非有であって

非無でもある無明は、上位梵の本然実相やその一面（無生無徳差の存在には部分がない！）を蔽掩したり、汚染したり、又は、繫縛したりする事は出来ない。虚実的な無明も又、上位梵やその一部を、非実有でなければ非虚無でもない虚幻の宇宙万有として顕現することも有り得ない。しかし、もし無明にはこのような果を生ずる能力があったとすれば、この無明は、同時虚実的な氣視力、氣奄力や幻泡ではなく、上位梵の能力を越える善悪の性質と性能を有する絶対的な実有である（*tirodhānā-nupapatti*）としか考えられない。それに、唯一無比の実在である梵の絶対で無対の実相界を非実在と同時に非虚無でもない虚幻の影像に変容する事も梵法に悖る。又、性質とその徳差を有しない純粹実在たる上位の梵は、自己を蔽塞したり、限定化したりや傷害を加えたりする詐善的で虚偽の化現力たる無明を自然界の構成要素とする事が、上位梵の全面的な無性無徳差、永遠の無対無為性および不壊の完全性に相反する特性であるとヴィシスタードヴァイタは主張する。

第三に、アドヴァイタ的な無明壊滅の可不可（*nivṛtta-yanupatti*）の問題である。シヤンカラを始祖とする絶対不二一元論学派によると、靈我、特に、神我と人我の努力によって生起する一切無分別の知は無始で不生の無明を壊滅させる能力がある。そして、その結果として、靈我は、無明の蔽塞的で虚偽的な束縛から解放される事によって、完全な解脱の境地に到達する。

一方、ヴィシスタードヴァイタによると、アドヴァイタ的な無分別知は、無明を全滅させる事がなければ、靈我をその繫縛から解放させる能力もないと主張する。何故かと言うと、「不生不滅にして、性質徳差のない生一本の上位梵のみが実存するのに対して、宇宙万有は実体性のない虚実で虚構的な泡影や上位梵の虚現に過ぎない」という無分別知の境地は、アドヴァイタの所説によると、個々の靈我を所在地とする以上、本来有限で虚実的な現象であり、永遠不生で普遍的な無明を当然、滅ぼす事が出来ない。更に、「永遠無始で同時虚実的な無明」という事柄は、明らかに排除し合う属性を有するので、同時に一体一物として存立する事が不可能である。そして又、単なる幻想や虚幻に過ぎない靈我の認識とその産物である一切無分別の知のみで、無明とその産物である万我物を解体したり、生死病苦を解滅したりや善悪と迷悟等を断滅させたりする事は出来ないということも自明の事実である。

第四に、アドヴァイタ的な無明の把握（*pranumānā-patti*）について。ヴィシスタードヴァイタによると、アドヴァイタ的な無明とその産物である宇宙万有を、虚実的な無明とその虚構的な活動の虚現的な産物である人間的な知識によって把握する事は不可能である。何故かと言うと、人間の感知とその能力が実存しなければならぬし、人間の感知力は、何らかの形で実存する事物や徳力、又は、何らかの方便をもって既に経験した実有の不在を捉えることが出来る。しかし、同時虚実的な人我および同時有無的な無明とその虚偽的な活動の虚現である万劫万有の世界も実存し得ないから、人我の感知力による無明と宇宙万有の把握も当然有り得ない。そしてもし、アドヴァイタが力説するように、人間とその感知力は虚実世界の幻想であると本気で認めたならば、当然、哲学だけではなく、一切の科学とその学説およびアドヴァイタの諸説諸論も、全く信用性がなければ実在性も勿論ないと認めざるを得ない。

以上をもって、アドヴァイタ・ヴェーダーンタによる「無明観」、特に、無明の本源と所在地、無明の実相界の根本、無明の壊滅の可不可および、無明の感知的な把握の理解を中心に、ヴィシスタードヴァ

イタ・ヴェーダーンタが繰り広げる批判の要点を紹介した。要するに、ラーマヌジャを初め、ヴィシスタードヴァイタの哲人は、シヤングラとその門弟が唱えている「無明論」を猛烈に批判しながら全面的に擯斥する。即ち、高次梵の本性的な要素でなければ、持ち前の属性でもなく、高次梵の単一で純然たる実在の無性無徳差の世界、特にその大寂緩慢で無対無分別の実相を蔽塞しながら、一切劫界の万我物事象と万変千化として虚偽的に化現すると同時に、高次梵をそう言った世界を超絶する本末因として虚構する本来無生で欺惑的な性能を有する虚実的な活力（一切を蔽晦する謎めいた氣視力）と観るアドヴァイタ的な無明説を、健全で堅実な論証、万代万人の存在のおよび実践的な経験、そして、万有存在の理法に悖る見解と見做し、謬説として斥ける。

② 梵我物峻別一如論学派による「大行梵説」と「万有有限説」。

アドヴァイタ的な無明観を繆悠之説として排斥したヴィシスタードヴァイタは、梵と宇宙万有の本然性質における動不動、無限性と有限性、完全性と欠瑕性、善悪、真偽や迷悟等の問題の整理とその解決の方法を梵、万我と万物の「本然的な異性同質観」という見地に立ってはかる。ヴィシスタードヴァイタが考えている「マーヤー」(māyā, 大行力、絶妙の大活力)の性質は、絶対不二一元論の「無明」と根本的に違う。ヴィシスタードヴァイタが唱道するマーヤー観、特に、梵、万我物、「無明」たるマーヤーと「絶大な活現成力」たるマーヤーとの相互関係に関するラーマヌジャの文の一部を略して紹介する。

『マーヤーは、素晴らしい創造の世界と絶妙極まりない大活現力を表示する語であるので、原質料(万我物の機前状態)や現劫の物質界も素晴らしい現象を造成する力があるから「マーヤー」と呼ばれる。更に素晴らしい大活現力の持ち主である梵は、物質の万界を創造するだけではなく、物質によって繫縛を受ける万我も創造する〔Śvetōśvara Upanisād, IV, 9〕。…無上の妙格者(たる梵)は、無明を有するのではなく、この素晴らしい万能力を本有とするから「大行梵」(Māyin, 絶大活現成の主)と呼ばれている。…無生(で物質的な)マーヤーの束縛を受けながら迷っている個我は、開悟した時に、永遠不生の唯一者を知るであろう〔Mundaka Upanisād, II, 21〕。…梵は自力の素晴らしい活現成(māyās)によって、様々なかたちで顕現する〔Bṛhadaranyaka Upanisād, II, 5.19〕。…極めて尽し得ない徳力が我が(梵の)マーヤーの本性である〔Bhagavad Gītā, VII.14〕⁽²⁷⁾。

先ほど引用した文は、言うまでもなく、ヴィシスタードヴァイタにおけるマーヤー論の骨子に過ぎないが、以下は、当学派学徒の論辯を参考にしながら、マーヤー論の要旨を説明する⁽²⁸⁾。

梵行、即ち、一切劫界とその万我物事象の本然自内心である狭義梵自体の生命力(略して梵力)の自然性能界には、概して言えば、三つの根本的な活動(活現成の三相)を識別する事が出来る。

先ず、梵力の本来無生無尽で隠然たる活現のことである。狭義梵の生命力活現の妙相とは、絶無、完全な精寂無為の虚無、全面的な不活動の虚空や狭義梵自体の虚幻でなければ、梵身の全面的に大寂緩慢、極微幽玄で無対無定相(空劫期)の存在妙相だけでなく、外面的に大寂不動、対他的に無対で無比の慶福を享受する狭義梵自体の隠然たる自存自立力の機現であって、狭義梵の本然秘蔵界とその妙身

諸相を永遠で無間断に存養する霊妙極まりない梵力の活動である。この次元は、狭義梵の無極霊秘で自内永福の世界であって、狭義梵以外の存在にとって、永遠に不可解で不可得（到達や体得の不可能）の神秘界である。同時に、梵身の潜在的な真相であって、梵身実存の一つの様態でもある万我物の空劫期（*inertia pre-cosmogonica*）においても、梵力自体は、狭義梵の無極秘蔵界を初め、梵身妙相の世界も、隠然たる活動をもって、永遠で無間断に養濡しながら、それらの存在を維持し続けている。ヴィシスタードヴァイタの信奉者は、狭義梵のこの神秘的な真相をヴィシュヌ男神（*vishnu*←*visulr vyāptau*, 一切世界を超徹する太極の生命）とも称する。

狭義梵の永遠の生命が本有するもう一つの活現の相とは、梵身の極微で幽玄の相を無量劫界の万我物事象として現成せしめる梵力の三種一如的な機能である。第一種の力とは、一切世界とその万有千化の生成化育を開始する狭義梵の創世力（*energia pancreativa*）である。第二の力とは、あらゆる世界とその万我物事象を隙間なく養濡しながら絶えず活性化する梵の自由な存養力（*energia pananimativa*）である。第三の力とは、万劫万有の開闢、進退および還帰の経過とその秩序を自ら決定し、主導しながら内外的に司る梵の通和的な君臨力（*energia pancrativa*・言い換えれば、一切有を内制する梵力の面と万有千化の依存関係を統制する梵力の面）のことである。梵力のこの真相は、ヴィシュヌ男神の妻ラクシミ女神と呼ばれる。

更に、梵力活現の三つ目の相とは、一切世界の機前状態（玄劫期）および宇宙万有の還滅後から次の成劫期の開闢までの間（空劫期）に万我物を極微精妙な梵身として維持する狭義梵の極めて精妙で静寂な活動（*activitas inertialis*）である。

上記の諸活現力を更に異なる観点からみると、一切劫界の万我物事象とその万徳千化を透徹しながら養濡し、内制しながら維持する永遠無尽の大魂魄としての狭義梵の活現と、万劫万有を越え、永遠を通じて不生不滅で無限に卓越した徳力を本然の性質とする狭義梵の超絶的な活現力を窺い知ることが出来る。

先ほど簡短に紹介した梵力とその機現は、本来無縁で独立した梵行ではなく、狭義梵の生命力を本末とし、一切劫界の顕密諸相を沁徹しながら、それらの世界万有を永遠を通じて超絶する狭義梵の本力の無限性能（*energia transcendentō-immanentis absolutā*）の多面多様な能所の活現成に過ぎない。

万有千化の実存を前提とする人類の存在的、特に、実践的な経験の立場から見れば、あらゆる行動の如何なる結果においても根本的に、自然で必然的に随伴する峻別不離で「表裏一枚」の因果関係を見極める事が出来る。一切劫界とその万有千化の実在性を論理の土台とするヴィシスタードヴァイタは、先ほど言及した現世的な因果の原理が一切世界の因果縁起の道理に通じ、その道理の普遍的活現の一相に過ぎないと主張する。したがって、梵力の創造的および存養的な活動によって梵身の内に生ずる変化とその結果においても、上記の道理が通用し、適用されているという見解はヴィシスタードヴァイタの定理である。

具体的に言えば、梵行によって、梵身の極めて微細で静寂な様態が終結を向え、万我物の極微で無定相の「万我原胚」（*brahmanda, hiranyagarbha*）が活性化され、全面的に不活緩慢で無自相の「原質量」（*prakṛti*）も動かされる事によって、生成化育的な発展を主導力に、万有万象の起滅、膨縮、増減、融合、分別化、個体化や結合等のような開翦的な秩序を天然之性とした活現成（コスモス化、*cosmizatio universalis*）は展開されて行く。

その半面、徐々に、死滅、融没、減縮や崩壊という退化的な解体化が主導権を握る事によって、生死、膨縮、増減や開閉等のバランスが崩れ、開示的で積極的なコスモス化（梵我物事象の活現）も衰弱しながら、万我物の積極的な隠静化と万変千化の沈静化（反コスモス化、decosmizatio universalis）は繰り広げられる事になる。あげくの果に、梵身の顕密真相である一切の世界とその万我物事象もやがて、梵身が開闢される以前の状態（万我原胚と原質量）に酷似した不活緩慢で無分別の様態（空劫期）に還帰する。要するに、万我物事象は、梵身の顕密的な真相であって、狭義梵に自然で必然的に依存する有限の世界である（creatura a sua natura limitata est）。言い換えれば、梵身の活現成と多種多様な発展を意味する万我物事象の活性化、開闢、生成化育と多様化、更に、梵身の活現成の隠静化を意味する万我物事象とその活現の閉闢的と、減縮的な万変千化の増加は、梵に依存する世界として、永遠を通じて、梵力の活動範囲から一瞬を一寸も離れる事が出来ないとヴィシスタードヴァイタは主張する。

今度は、人我の活動と人我の究極目的である解脱の得不得の事柄を、梵身活現法（普遍的な因果縁起法）の一法である「業法」の眼で見て、その関係を略述する。

人我を初め、一切有とその徳力変化の善悪、迷悟や損益等のような「表裏一枚」の現実、万有の因縁的な活動を直接の原因としながら、狭義梵の自然で自由な創世を間接的な動因とするが、本然自性における梵と一切有の無極で無尽の相違は、一切劫界の万我物事象とその徳力の本末終始、特にその有限性、欠陥性、罪悪性、無知、未知や依存性の究極的な原因である。斯くて、宇宙万有の不完全性の諸相は、梵力の不能、その欠如的・虚偽的・虚構的・幻影的や虚実的な活現、又は、梵の自由意志による悪行、策略、落とし穴や残虐で勝手気儘の遊化でなければ、因縁のない突発的ないたずらでもなく、梵我物事象の本然之性と各自活動の因果縁起法の普遍的な機能を太極因とする自然で必然的な結果であるとヴィシスタードヴァイタは主張する。

更に、人間界における罪惡も梵意の決定ではなく、万有活動原理、特に、「業報」の原理に順従する人我の自業の自得（自然で必然的な結果）である。それは何かと言うと、無償で完全に自由な寵愛をもって、自らの生命と幸福を分かちたい梵は、大寂で無定相の様態に住ずる万我（神我、人我等）の原胚を活性化し、各々の個我を、前生中に為し遂げた善悪の果報として、最適な物質と結合させた後、この世に出現させる。狭義の梵を除いて、全ての個我は、前世業報の繫縛をこもり、その運命を背負っているが、それらの制限が個我の稟性に属する悟知、自由意志や自由行動の能力を絶え間なく蔽塞したり、全面的に中止したりする事はない。個我には、現世においても、来世においても、如何なる存在形態においても、改心、離罪、断悪や善愛の道が何時も開かれている。人為的な業報のカギが、梵を最高の対象とした自由な信愛を元とする善行の自由な選択と誠意に基づく実践である。

一方、人類の人生的な経験、特に、心行を分析して見ると、ある苦悩、迷知や罪惡は、明らかに人我の自由意志、自己中心的な志向とそれに基づく自由行動の結果であって、必然で不可避的なものではない。しかし、人我の意志決定も当然、前業を因縁とする果報である面において自然で必然的な結果、即ち、人我自業の「自得」そのものである。にも拘らず、梵を認め、どんなものよりも梵を信愛しながらその無償の恵愛と神摂理に全身全霊を委ね、梵我物の秩序に従って生きる人我は、前世と現世の業報の束縛を克服し、善行とその果報を増加する事によって、狭義梵の榮福に参ずる、即ち、究極の解脱を体

得する事が出来るとヴィシスタードヴァイタの聖哲は一貫して教えている。

ヴィシスタードヴァイタが説く梵行は、シヤンカラが主張する永遠で同時虚実的な無明 (māya avidya), 即ち、梵我物の真理とその活現成の真相を掩蔽したり隠翳したりする力、梵自力による虚偽の顕現、宇宙万有をその自然な性において繁縛したり汚染したりする梵外の不可抗力、又は、万我物、特に人我の機能や能力を虚構に仕立てる虚実的な勢力の如きものではない⁽²⁹⁾。ヴィシスタードヴァイタが唱道する宇宙万有の依存性と有限性は、形而下界の善悪、美醜、正邪、真偽、迷悟、自由不自由、無明や未知の本源的な因縁ではあるが、厳密に言えば、現存する形而下界だけではなく、一切劫界の万我物事象の顕密世界の天然性質の自然で必然的な本徳である。一切有の太極的な自内性であって、絶対的な大魂魄である梵は、本来の性質とその徳力やその機能において、唯一無比であって、もう一つの梵が永遠にあり得ない。一方、梵身真相の面々である万我物事象は、無限又は無欠でなければ、梵と関係なく実存する世界でもない。従って、無尽無限で全面的に自存自立する宇宙や我物事象は、空前絶後であって、無稽の空語である。

要するに、梵は、一切の劫波を通じて、万我物事象の創造主であり、万有千化の太極的な存養主、大魂魄と最高の君臨主であって、畢竟、還劫期末に一切有を梵身の極微で精妙な要素として受け容れる能力がある上に、あらゆる存在にとって、永遠に不可解、不可得で絶妙と神秘の極まりない活力を自存的な生命（自存自立力）の性能として有するので、「大行梵」(Maha-māyin) 又は、「一切有の本末因」と呼ばれる。一方、狭義梵の活現成身である一切劫界とその万我物事象は、梵に依存する世界であって、梵と等しい存在でなければ、狭義梵自体に変成したり、梵を蔽塞や汚染したりする事が永遠にあり得ない。よって、永遠の有限性と不完全性という意味での「無明」は、万我物事象とその万徳千化の天然性の根本的な属性であるとヴィシスタードヴァイタは主張する。

四. 梵の本来性質とその徳力を示す御名

人類文化の中心的な役割を成す宗教において、宇宙万有の絶対的な「存在」は、様々な名で呼ばれている。モーゼの「吾れ、ヤーヴェ (YHW)、存在する者である」、老子の「無名の道」、孔子の「天」、キリストの「父」、使徒パウロの「主なる神」、マホメットの「唯一絶対神たるアッラー」、空海の「摩訶毘盧遮那如来」、臣安万侶の「無名無為の混元」、朱子の「太極」、道元の「仏性・法性・恁麼・一課明珠・諸法実相・三界唯一心・御いのち」、又は、親鸞の「無礙光如来」という名は、その一例に過ぎない⁽³⁰⁾。

万代万民の聖哲と肩を並ぶラーマヌジャ (¹⁰¹⁷/_{1137A.D.}) を初め、ヴィシスタードヴァイタは、梵という絶対的な存在者が、完全に理解されたり、言葉で精確に表現されたりする事は不可能であると明言する一方、梵の性質とその徳力、特に、梵の宇宙万有との関係およびその顕密的な活現成の諸相を様々な角度から洞察しながら、出来るだけ精確な術語をもって描写する。そのために、ヒンズー教の聖典、古論釈書や註釈書等に出て来る神名を用いて、梵の異名、梵の性質、性能や無量の徳力の絶対的な無限性を

示唆する「敬称」として扱っている。以下、ラーマヌジャを初め、梵我物峻別一如論学派が用いる梵の御名とその意味の多面性を簡単に説明する⁽³¹⁾。

まず、梵の本然性質の根本的な徳力とその性能を示す Purusottama, Paramātman, Bhagavan, Nārāyaṇa, Īśvara, Antaryāmin と Vāsudeva という神名の意味を略説する。

「梵」(Brahman) という語は、'brhattvāt' や 'brahmanatvāt', 即ち、自成自足でありながら一切有を創生し、成熟せられる力、そして、'brhaspati' や 'brahmanaspati', つまり、祈祷を適う者や全能者という永遠の創世主・無生不滅の全能神をあらわす。更に、現存する万世万有の幽玄で大寂緩慢の様態(空劫期)を途絶え、宇宙万有の開闢を図り、万我物等の隠現、生成化育や解体を開済する梵の創世力の主勢(陽気)をブラフマー男神と呼び、創世の副勢力(陰気的な活力)を本性とする梵力をサラスヴァティ女神と称ずる。両神共は、梵の創造力の異なる機現であって、梵から切り離す事がなければ、お互いも不離の絆で結ばれている「三位一体」である。異伝によると、梵の存養的、活性化のおよび盈濡的な勢力がヴィシュヌ男神(^{Vīṣṇur vyāptam, 遍満天, 彌論者})と呼ばれ、万有の存在と活動を維持し、保護する副主勢力(陰気的な活力)がラクシミ女神と称ぜられる。そして又、現劫の宇宙において、生死、増減や善悪の進退等のバランスが崩れ、生死化育的な活現より破壊的で死滅的な進化は、主導権を握る還劫期中に、万我物事象も当然、衰弱しながら消滅し、微細化しながら鎮静化する事によって終極を仰え、宇宙万有の閉闕が訪れる。万世万有を斯くした様態で絶えまなく養濡しながら維持する梵力の勢力をシヴァ男神、そして、その副流的な奉養力をカリ女神と名付けられている。

プルシヨッタマ(Purusottama, 絶対的な大魂魄)とは、一切劫界の万我物事象を沁徹しながら永遠に超絶する絶美極まりない「大魂魄」である。この語は、梵の本然性質を成す無量で無尽の徳力の内に、梵の匹儔なき精神性、神秘の極まりない性格、梵の沁徹性と存養力を強調する御名である。

パラマートマン(Paramātman, 超徹的な靈我)とは、万世万有を遍徹しながら永遠に超越する実相、即ち、万我物事象の絶対不可得的で実体的な靈我である。この名は、梵の無限徳力の内に、梵の自存自立力、梵の本然秘蔵界の不変的な実在性、その精神性と無上の妙格を示す語である。換言すれば、「パラマートマン」という語は、梵が、万我物事象の太極的な靈我であると明示する。

ナーラーヤナ(Nārāyaṇa, 万有の本末神)とは、一切存在の本末因、万有起滅の本地や究極的な「帰依処」(^{nārāṇām, ayanam})である。この語は、梵が、人格的や神格的な存在者ではなく、一切有の「性格」を無限に超絶する靈妙極まりない性格を本有する万我物事象の創造主であって、究極的な拠り処であると示す⁽³²⁾。

バーガヴァン(Bhagavan, 無限の博愛と無上の恵愛の主)とは、罪惡や不徳の幻影さえもない無限無欠の善美徳を本然性質とする慈悲と寵愛の存在である。この名は、特に、梵の無辺際 of 善智と無償の恵愛を指示する語である。

イーシヴァラ(Īśvara, 無尽至福の主)とは、梵の無量で無尽の徳力とその性能の内に、一切劫界の至福境地を絶する悟悦、慶福と自由自在性を享楽する万主の主としての梵の敬称である。

その他に、アンタリヤーミン(Antaryāmin, 万世万有の内制主)という名は、大魂魄たる梵の遍在的な通総力、ヴァースデヴァ(Vāsudeva, 遍在主)は、梵の永遠の遍在性、そして、クリシナ(Krishna, 大愛の主)は、万代万人、特に、何よりも信愛する謙虚な信奉者を救済する梵の忠実な慈愛を強調する

神名である。

更に、余り知られていないが、ラーマヌジャを初め、ヴィシスタードヴァイタは、時々用いる梵の仮名もある。その内から三名を紹介する。

先ず、アジャ (*Aja*, 不生の存在者) とは、梵の不生性、永遠性および「親のない事態」を示す梵の仮名である。次にヴァイシヴァーナラ (*Vaiśvānara*, 超絶者) とは、一切存在を養濡しながら活性化する絶妙極まりない性格を有する靈我である。ラーマヌジャは、ヴァイシヴァーナラの広大無辺の性質を下記の如く描く。

「天に輝く火の世界はヴァイシヴァーナラの頭であり、日月は、彼の両眼であり、空気は、彼の肺の呼吸であり、大地は、彼の胸であり、水や海は、彼の胆嚢たんのうであり…等」 [*Mundaka Upaniṣad*, II, 1.4.]⁽³³⁾。

そして、ブーマンという仮名である。ブーマン (*Bhūman*, 最大の存在者) という語は、梵の唯一無二性、特に、梵の本性性質を構成する慧智と慶福の無比卓越性を強調する表現である。

先ほど紹介した梵の抽象的な名の他に、ヴィシスタードヴァイタは、眼前現象界の或る存在を「象徴」として巧みに利用する。梵の無限で絶妙極まりない宝蔵界を解き明かすために、多くの象徴が用いられているが、ここで、例として、*Ākāśa*, *Daharākāśa*, *Prāna*, *Akśara* と *Jyotis* の内容を簡単に説明しながらその神学的な主意を指摘する⁽³⁴⁾。

アーカーシア (宇宙大気) という術語は、ヒンズー教の聖典や論釈書等に頻繁に用いられている。「アーカーシア」は、古来、梵身の一相と見做される原質料 (*Prakṛti*) の開発と進化の過程に発生した空間や大気という現象だけではなく、全宇宙とその存在発展の諸過程を通じて実存し、万有千化を養活する透明な浄質の「氣」として見做されて来た。実在性、遍在性、養濡性、精浄性、透明性、超感覚性と活気を天然の性質とするこのアーカーシアは、一切劫界とその万我物事象を沁徹しながら超越し、内制しながら自由自在である梵を象徴する事になった。換言すれば、アーカーシアが宇宙万物にとって、必要不可欠な養気であるように、梵も、万劫万有にとって、絶対不可欠な存在であって、一切を絶えず養濡する遍在的な存在であるという真理を「アーカーシア」の概念をもって表現している。

ダハラカーシア (普遍的な生氣) という概念は、現象界の精妙な生氣や生命力で充ちた空間だけではなく、ヒンズー教の聖典等の中で、しばしば、全世界の万有の心を沁徹しながら、万我物の発生、化育と還帰の本地およびその内外的な秩序を司る幽玄の生力として描かれている。ダハラカーシアは、極大と極微の諸世界を遍満しながらその活動を司る梵の象徴である。

プラーナ (氣息、呼吸) という語は、有機万物の呼吸、生氣や命我の生力、個我諸活動の原理を意味する概念であるため、「絶対的な呼吸」を本性性質とする梵の象徴として用いられている。

アクシアラ (不変の大極) という語は、宇宙開闢以前に存在していた未開で未分別の純質、激質と闇質の原状を意味する半面、現劫の万有の本源、原動因と存養主でありながら本然自内性において不変である梵の大極的な面を示す象徴的な概念として用いられている。

ジョティス (光) という語は、現象界の光明や光力、又は、靈我の解脱境地を本義とするが、一切の悟知と栄光を遙かに越える梵の光明と絶美の極まりない性質を示唆する象徴的な概念として頻繁に用いられている。

五. 梵の救済的な活現を論ずる「化梵説」

狭義梵の極密諸相、特にその妙格と梵力の自存自立的な性能、更に、梵意を出発点とする創世、万有の存養と万我物事象の究極目的の他に、梵の自由で無償の顕現（「自己示現」, ^{prādhurbhāva, theophaniae}）, 特に, 化身（^{theophaniae anthropomorphicae}）は、人間にとって、「玄之又玄」、即ち、完全に理解と会得出来ない神秘の世界である。梵の本然秘蔵界、特にその妙格、梵力の性能、創世的、存養的、内制的、通綫のおよび極めて隠靜的な活現について、既に説明した⁽³⁵⁾ 以下は、現世界、特に人間界における梵の顕現とその役割を中心に、ヴィシスタードヴァイタの「^け化梵説」の心髓を紹介する。

梵の顕現⁽³⁶⁾ とは、一切存在の絶対自内心たる狭義の梵（略して「梵」）は、自らの身体の様態である万劫千界の我物事象の開闢、生成化育と壊滅の諸過程において、無償の恵愛をもって、万我物の真福のため、何らかの形態を自由に受容して万我物事象の世界に出現して、その目的の実現をはかる。換言すれば、梵の顕現とは、梵身界の全体やその一相の真福や救援を実現する為に、狭義梵が位格的な存在として、時と場に応じて出現する。ヴィシスタードヴァイタは、狭義梵の位格的な化現（^{prādhurbhāva, theophaniae personales}）として、概ね、下記の五種を識別する。

化梵の第一種として、一切存在とその変化の諸相を超徹し、靈祉と靈力を自性とする梵の最高で神格的な顕現（^{sūkśma, hypostases transcendentales}）があげられる。この場合、狭義の梵は、一切有を超絶しながら沁徹する無辺際際のプルショッタマ（Puruṣottama, 大魂魄）、万有を活性化しながら超越するヴィシュヌ（Vishnu, 太極の生命の主）と、無償の寵愛をもって一切を見守るバーガワン（Bhagavan, 無限の仁愛と栄福の主）という妙相をもって顕現しながら普ねく活動する純粹な靈格神である。

第二種として、梵の遍満的で根本的な活動の神格的な顕現（^{vyūha, hypostases universales principales}）があげられる。この場合は、梵が、成劫期と還劫期を通じて、創造的、存養のおよび救済的な諸活動において、万有個性の設定とその化育を統御する遍在的な内制神ヴァスデヴァ（Vasudeva）、万我の存立とその諸活動を無間断に養濡する妙格神サンカルシアナ（Sankarśana）、あらゆる靈我の精神活動を養い、活性化する無辺際智の神ブラディウムナ（Pradyumna）および、万我の永遠至福をはかり、普ねく様々な救済活動を展開する大福神アニルッダ（Aniruddha）として活現する。

梵顕現の第三種として、有情的な化身（^{avatatāra vibhāvā, incarnationes rationes vel incarnationes}）があげられる。それは、宇宙万有、特に有情界が真福と真の利益を得るために、動物や人間の身を受容し、この世に現われ、救いの業（教行信証）を通して衆生を導き、万有の調和的な共存と究極の目的達成をはかる梵の動物物的（^{theophaniae zoomorphicae}）や人格的な顕現（^{theophaniae anthropomorphicae}）である。梵の動物的な化身として、人類の存続と発展に必要な自然環境を整えた聖魚マツヤ、聖亀クールマと聖猪ウァラーハがあげられる。更に、原始社会の罪惡と戦い、人類啓蒙に全力を尽した半人半獅ヌリシーナ、人祖ヤーマナ、正義の王パラスラーマと刹帝利族の王ラーマとして生まれ、献身的な活動を通して人類を全滅から救っただけではなく、文化を発生させ、その発展向上に全身全霊を尽しながら、天啓とその正道（梵我物の真理に基づく生き方）を人心に植え付けた梵の人格的な化身であった。そして、人類の精神的な向上に新路を切り開いたクリシナや釈尊（近代に入ってキリストを加えるヴィシスタードヴァイティンもいる）も梵の人格的な化身して見做されている。更

に、未来に出現し、人類、特に梵を信愛する者を済度しながら至福へ導くカルキン (Kalkin, Maitreya) の姿も聖典の中で描かれ、信仰の対象とされている。

梵顕現の第四種として、梵力による人我の憑依 (antaryāminatara, pos-siones spirituales Divinae) があげられる。これは、梵によって設定された目標を達成する為に選ばれた人々の精神力や才能を通じて梵の力と権能を示す梵の不思議な活現である。

そして、梵顕現の第五種として「梵坐」(arcāvataṛa, theophaniae hylomorphicae, 「神符, 「神坐」) があげられる。これは、全身全霊を挙げて梵を信愛し、崇拜する帰依者との精神的な親交と信頼を深める為に、象徴的な聖像を通して信奉者の心を魅了せられ、精神的な幸福感、恍惚や神憑りを興す梵の臨在 (Presentia Divina) である。

今度、梵の人間的な出現(化身)の目的、主な役割と真相についてヴィシスタードヴァイタの見解を下記の引用文をもって紹介する。

『本然之性において一切有を永遠に超絶する梵は、人間の為に近付きやすく、親しみ易い存在となった。彼は、人間の理解と表現力の範囲を越えているにも拘らず、信奉者のため、彼等の心眼が届く範囲に在る』⁽³⁷⁾。

『有徳者の保護、悪人の崩壊、正法の秩序の再建と確立の為に、時代の必要に応じて私(梵)は自由にこの世に生まれる』⁽³⁸⁾。

『我れを礼拝する信奉者への恵愛と万人の救いの為に私は人間の身を受容し、ヴァスデヴァ王の息子クリシナとしてこの世に生まれた(avatirna)。しかし、この出現によって、自らの本来の性質を放棄する事がなければ、その徳力の本性においても一切の減小はない』⁽³⁹⁾。

『一切の有の主として私の超絶の相を知らない愚者は、人間のすがたで現われる私を軽蔑する』⁽⁴⁰⁾。

『梵は、無尽の慈愛において、自らの身の一相である人間の苦悩等を放って置く事はしない。彼は、万人の幸福を望んで働いているが、皆を、例外なく、救う為に、一切行の天然理法〔例えば、因果縁起〕を犠牲にしたり、無効にしたりする事はない』⁽⁴¹⁾。

要するに、現世、特に人間界における梵の顕現は、主として、梵法に基づく人倫が崩壊した時、正道の回復とその維新の為に、革命を辞さず⁽⁴²⁾、改革の道を公示し、それを遂行する。人間界における正道の復興へ導く梵の化身たる者の救済的な活動の内に下記の行が根本とされている。先ず、正道に励む信奉者を保護し、慈愛を活動の基準とする。次に、信奉者を最高の解脱へ導くこと。更に、梵法に遵ずる人道に悖る悪道を露現し、邪道と悪行を遂行する者を処罰する事によって梵法の道理(善因善果等)を明らかにすること。第四に、悪人の改心と開悟を促す活動である。人々皆は梵の子らである以上、悪人にも真福への正道が十分に示されるが、梵の慈愛は、人間性の根本的な属性である自由意志と判断力

を阻止するものでなければ、梵法を中断したりや回避したりするものでもない。梵の慈悲と寵愛は、無理な妥協策でなければ、隠蔽的な根回しでもなく、普遍理法に遵ずる正義の慈愛であるとヴィシスタードヴァイタは主張する。

更に、梵の化身たる者は、社会の私公的な舞台に立って正道を演じる役者、大魔術師、国家の利益を追求する英雄、世襲制によって選定され、世間体によって崇敬される皇帝や教祖ではなく、梵法に遵ずる人道の弘布に全身全霊を捧げる梵の人格化である。彼らは、我々と同様に生死病苦を体験するが、我々と違って、自分の前生とその活動を意識しながら人間の真福増大の為に無償の活動を繰り広げる事によって自らの使命を全うする。梵の人身との結合自体が、梵の完全に自由な意志によって実現するとも言えども、人間にとって、永遠に不可解な「玄之又玄」である。しかし、人身の受容によって活動する梵には本性的でネガティブな影響が一切なく、却って、様々な活動によって、時と場に応じて、新世界が展開されるという見解はヴィシスタードヴァイタの通説である。

結語にかえて～上説の神学的な奥義の特色

二回連続の論文の中で、梵の絶対的な性格を提唱する「妙格説」、梵の超徹的な霊質を論ずる「大魂魄説」、梵の自然身とその根本的な性質を論述する「梵身説」、梵我物の性質的な関係を論弁する「異性同質説」、「親疎一如説」、「太極実体説」と「因果現成説」の心髄をヴィシスタードヴァイタの哲理として説述し、上説の宗教的、特に神学的な意味とその特色を示した。更に、ヴィシスタードヴァイタと違う立場を取って、梵の「唯一実在性」、「無性無徳差」、絶対的な「隔絶性」や「唯一実体性」、そして、万有千化の「虚無性」、「虚構性」や「因果の虚現性」を唱道するアドヴァイタ・ヴェーダーンタの各論の他に、「一切無我説」、「一切無常刹那説」、「一切転変説」、「因果妄作説」や「因中無果説」を唱える学派の根本的な考え方を述べ、ヴィシスタードヴァイタによる批判の要点をまとめ、自分の意見も述べた。

本論文の中で、引き続き、梵の本来性質を成す無量徳力の根本を説示する「五大妙徳論」と「五大妙機論」、一切の制限、繫縛や蔽塞から完全に自由な活動を繰り広げる梵の無礙行を論ずる「大行梵説」、および、不偏の正義と無償で普遍の慈愛に基づく梵の救済的な活現をとく「化梵説」の哲学的な定理とその神学的な特色を説明した。

以下、梵の本来性質の根本徳力とその活現の真相を論究する「五大妙徳論」、「五大妙機論」（絶対自力説、梵力静養説、梵力三大行説、無償恵愛説）、「大行梵説」、「万有有限説」（と異なるアドヴァイタの「無明説」とその批判）、「化梵説」と梵の異名の神学的な深意とその人間学的な趣旨の特色を改めてまとめる事にする。

ヴィシスタードヴァイタの「五大妙徳論」によると、梵は、無量で無限、そして永遠に無欠の善美徳を本来性質の無尽蔵界とする。そして、その内に、全面的に不依で自存自立的な実存力、不生不減で無辺際^{へいそく}の悟知、永遠に不減で絶え間なく増大する慶福、そして、本来自性の万徳力を無間断に生かす無限で完全無欠な永存的養活は、梵の本来性質の根本的な「五大妙徳」と見做され、梵の本来宝蔵界の神秘極まりない不可得の自内心と呼ぶ事が出来る。宗教、神学と人間学の立場から見ると、実在力、慧智、

幸福等の万徳の面において、無限で完全無欠の梵は、比べようもない「唯一無二」の存在者であり、宇宙万有、特に、知識・幸福と自由の能力を本有する万我（人我も）にとって、この上もうない安らぎと安心感の拠り所でありながら畏懼（いぐ）と魅了の念を呼び起す永遠の驚異である。

次に、「梵力五大妙機論」によると、「絶対自力」、「創世力」、「存養力」、「君臨力」（内制的な通総力）、「外活静養力」（外的な活現を自制する自力）とその活動は、梵の本然万力とその無量無辺の活現の根本である。本論が提唱する哲理とその神学的な奥義の特色を斯くの如くまとめる事が出来る。

- 一．梵は、永遠を通じて、無間断に栄え、全面的に不依で自存自給的な生命（自存自立力）を本然性質（を成す無量で無限の徳力とその性能）の本力とする絶対神である。
- 一．梵身の極微で幽玄、更に、全面的に不活緩慢な様態に住ずる万我物を絶えず存養しながら通総（内制したり君臨したり）するのは、梵力の永遠で極めて静妙な機能である。
- 一．梵身の極微幽玄の万我原胚と不活緩慢の原物質は、一切存在の本末的な質量因でありながら、梵の自力は、万劫万有の原動力因（つまり、創世力、存養力、通総力）である。換言すれば、絶対神たる梵は、一切存在の究極的な創造主（Pancreator）、存養主（Pananimator）、君臨主（Pancrator）と至福極地（Finis Ultimatus）である。
- 一．梵は、完全に自由な決意と行動をもって宇宙万有を創造し、維持しながら養い濡す。更にこの梵は、自他存在の一法たる因果縁起法を通して、万我をその究極目的である解脱（梵との明合とその至福参与）へ導くが、その目的達成が強制ではなく、各自の天性に属する自由決定とその行動（自業）の自然で必然的な結果（自得）である。
- 一．万我物事象、その徳力と性能は、梵身の栄光を増減させるが、梵の本然秘蔵界の慶福、慧知と栄光に、ネガティブな影響が一切ない。

更に、「大行梵説」によると、梵は、何ものにも蔽塞されたり、繋礙されたりする事がなければ、制限や他者行為の悪影響も蒙る事のない、永遠に自由自在の大行神である。一方、「万有有限説」によると、一切劫界とその万我物事象は、本然性質において有限であって、梵の活現範囲から、一瞬も一寸も、永遠に離れる事がない。

そして、神秘極まりないこの梵は、自らの身体の様態である宇宙万有、特に万我の真福の為と罪惡の滅亡の為、自由で無償の慈愛をもって、何等かの形態を受容し、万我物事象の世界に出現する。化身を初め、他の様々な顕現は、梵の救済的な活動を主な目的とするが、その活現によって、人間の自由意志の性能が全面的に阻止される事がなければ、一切有の自然理法も中止されたり、一時停止したりする事もないとヴィシスタードヴァイタは観ている。従って、人我（等の靈我）の解脱境の会得とは、梵の無償慈愛による様々な活現、特に、人格的な顕現によって示された生き方と救いの業に対する各人の自由決定に基づく信行（梵への信愛と慈善的な行為）の自然な結果（証、自得）である。人我は、梵の慈愛と救済的な業を拒否する事が出来るが、梵法実現（因果原理）の範囲から、永遠に離れる事が出来ない運命（善行→善果、悪行→悪果）を背負っている。

註

- （1）『梵我物峻別一如論学派の梵論』〔そのⅠ〕と〔そのⅡ〕、鹿児島女子短期大学紀要、第33号（1998）

と第34号 (1999)

- (2) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, transl. by Rangacharya M. etc, Munshiram Manoharlal Publ. ³1989 (1889), vol.1. pp.iv-Lxiv, 84-114, 196-200, 263-267, 290-316. Chari S. M. S., FUNDAMENTALS OF VISISTĀDVAITA VEDĀNTA, Motilal Banarsidass, 1987, pp. 223-276. Carman J. B., THE THEOLOGY OF RĀMĀNUJA, Ananthacharya Ind. Research Inst., 1981, pp.68-113, 254-258. Dasgupta S., A HISTORY OF INDIAN PHILOSOPHY, Motilal Banarsidass, 1975, vol. III, pp.303-304.
- (3) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. I, pp.84-114, 199-200, 263-316. Chari S. M. S., ibid. pp.234-237. Carman J. B., ibid. pp.70-71, 99-110.
- (4) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. I, pp.84-88, 91-114, 199. Chari S. M. S., ibid. p.234.
- (5) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. I, pp. 199-200.
- (6) Ibid., pp.91-92.
- (7) これらの引用文は, THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. I, pp. 84, 86, 87, 88, 91, 96, 101, 105, 114, 263-264, 267, 290から収集したものである。
- (8) この引用文は, ラーマヌジャ著作の‘GŪTĀBHĀSYA’, ‘VEDĀRTHASAMGRAHA’ と ‘THE VEDĀNTAS ŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA’ から Carman J. B. [ibid. pp.70, 71, 99, 101] が引用したものである。
- (9) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. I, pp.iv-Lxiv, 84-92, 198-201, 263-302. Carman J. B., ibid. pp.88-113. Dasgupta S., ibid. vol. III, pp.303-304.
- (10) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. I, pp.84, 174, 181, 198, 249-251, 310 (主として Chândogya Upanisad, VI, Taittiriya Upanisad, II と III, Mundaka Upanisad, I を引用する). Chari S. M. S., ibid. pp.232-241. Carman J. B., ibid. pp.98-113.を参照。
- (11) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. II, pp.231-232 (231-234 も参照)。
- (12) Chari S. M. S., ibid. pp.242-247. Dasgupta S., ibid. vol. III, pp.155-164, 195-201, 301-303, 388-392. Carman J. B., ibid., pp.114-118, 134-135. Kumarappa. B., THE HINDU CONCEPT OF DEITY, Inter-India Publ. 1979, pp.211-217. Devamani B. S., THE RELIGION OF RAMANUJA, CLS. 1990, pp.10-11. Lâlâ Ch., PHILOSOPHY OF BHAKTI, B. R. Publ. Corp. 1989, pp. 16-17. 井原徹山, 『印度教』大東出版社, ³1981 (‘43), pp.357-359, 365-366.更に, 『梵我物峻別一如論学派の梵論』[その I], 特に, 「梵身説」と「親疏一如説」を参照。
- (13) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. I, pp.175, 196.
- (14) Kumarappa. B., ibid. pp.211, 212. この引用文は Bhagavad Gitâ, VIII, 4, XII, 19, XIV, 3 に基づくものである。
- (15) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. I, pp.285-286 (302-308 も参照)。
- (16) Ibid, pp.287.
- (17) THE VEDĀNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHĀSYA OF RĀMĀNUJĀCĀRYA, vol. I, pp.173.この文脈は Svetasvara Upanisad, IV と VI, Madyandina Brhadâranyaka Upanisad, II と IV, Cûlica Upanisad, V, Taittiriya Upanisad, III, Taittiriya Brahmanâ, II, Subala Upanisad, II, Vedanta Sutra, II, Vishnu Purana, I と Bhagavad Gitâ, IXに基づいている。
- (18) Chari S. M. S., ibid. pp.247-250, 391-400. Kumarappa. B., ibid, pp.154-159, 217-226, 261-265. Dasgupta S.,

- ibid. vol.Ⅲ, pp.157-158, 195-201, 296, 388-392. Carman. J. B., ibid.,pp.114-135. 更に、『梵我物峻別一如論学派の梵論』〔そのⅠ〕の「大魂魄説」と「梵身説」；〔そのⅡ〕の「因果現成説」も参照。
- (19) Carman. J. B., ibid.,pp.114-154. Chari S. M. S., ibid. pp. 201-204, 271-316. Kumarappa. B., ibid, pp. 249-316. Dasgupta S., ibid. vol.Ⅲ, pp.286-295, Vyas R., THE BHAGAVATA BHAKTI CULT AND THREE ADVAITA ACARYAS, Oxford Univ. Press, ²1982 (70), pp.116-121.
- (20) Carman. J. B., ibid., pp.119,120.
- (21) Ibid, pp.120, 121.
- (22) Ibid, pp. 140, 141, 142, 143.
- (23) Sharma R. M., ENCYCLOPAEDIA OF VEDÂNTA, Eastern Book Linkers, 1993, pp.7, 83-84. THE VEDÂNTASÔTRAS WITH THE SRĪBHÂSYA OF RÂMÂNUJÂCÂRYA, vol. I . pp. xxxiii-xxxiv, 119-185. Chari S. M. S., ibid. pp.252-260. Dasgupta S., ibid. vol.Ⅲ, pp.175-179.Grimes. J., THE SEVEN GREAT UNTENABLES, Motilal Banarsidass, 1990, pp.1-118.
- (24) 『梵我物峻別一如論学派の梵論』〔そのⅠ〕, 第33号, 特に, 「妙格説」；〔そのⅡ〕, 特に, 「ヴァイバーシカは一切無我説とその批判の要点」, 「絶対一元論学派の唯一実体説とその批判の要点」, 「絶対不二一元論による因果虚現説とその批判の要点」, 「仏教系の一切無常利那説による因果観とその批判の要点」および「唯物論的な唯世学派による因果妄作説とその批判の要点」を参照。
- (25) Chari S. M. S., ibid. pp.179-188, 260-271.
- (26) THE VEDÂNTASÔTRAS WITH THE SRĪBHÂSYA OF RÂMÂNUJÂCÂRYA, vol. I , pp. Xxxiii-xxxiv, 119-185. Kumarappa. B., ibid, pp.194-210. Chari S. M. S., ibid.pp.253-260, 315-318. 更に, 『梵我物峻別一如論学派の梵論』〔そのⅠ〕, 〔そのⅡ〕を参照。
- (27) THE VEDÂNTASÔTRAS WITH THE SRĪBHÂSYA OF RÂMÂNUJÂCÂRYA, vol. I , pp.149.
- (28) THE VEDÂNTASÔTRAS WITH THE SRĪBHÂSYA OF RÂMÂNUJÂCÂRYA, vol. I , pp.Xxxvi, 98, 148-158, 173-175. 285-308; vol.Ⅱ . pp.xl-lxvii, lxxxvi-lxxxviii, 71-84, 96-115. Chari S. M. S., ibid. pp.226, 251-252. Carman. J. B., ibid., pp.238-248. Dasgupta S., ibid, vol.Ⅲ, pp.179-188. 井原徹山, ibid, pp.208-214. 『梵我物峻別一如論学派の梵論』〔そのⅠ〕の「梵身説」を参照。
- (29) THE VEDÂNTASÔTRAS WITH THE SRĪBHÂSYA OF RÂMÂNUJÂCÂRYA, vol. I , pp.xxxiii-xxxvi, 119-150; vol.Ⅱ, pp.282-303. Grimes J., ibid, pp.25-128. Radhakrishnan S., INDIAN PHILOSOPHY, Princeton Univ. Press, 1957, pp.547-554. Chari S. M. S., ibid. pp.32-37,55-58, 175-176, 229-231, 252-270. Lâlâ Ch., ibid, pp.12-15. Dasgupta S., ibid. vol.Ⅲ, pp.165-179, 304-346. Carman. J. B., ibid., pp.176-198.
- (30) 紀元前13世紀のモーゼ, 紀元前6世紀の老子, 紀元前5世紀の孔子, キリスト(紀元, 即ち西暦をキリストの降誕から数え始まった), パウロ(～67A.D.), マホメット(570-632), 空海(774-835), 臣安万侶(9世紀), 朱子(1130-1200), 道元(1208-1253), 親鸞(1173-1262)。
- (31) THE VEDÂNTASÔTRAS WITH THE SRĪBHÂSYA OF RÂMÂNUJÂCÂRYA, vol. I , pp.Lxvi-Lxix, 3-4, 95-98, 308-318; vol.Ⅱ . pp.xxv-xxx, xxxiv-xxxix, xL-xLvii, 35-40, 51-117, 148-150, 172-184.井原徹山, ibid, pp.187-208.Carman. J. B., ibid., pp.67, 158-175. Devamani B. S., ibid, pp.4-20. Chari S. M. S., ibid. pp.223-228.
- (32) ラーマヌジャは, 'Purusottama', 'Paramâtman', 'Nârâyana' および 'Vishnu' という名を特に好んで用いる梵名である。
- (33) THE VEDÂNTASÔTRAS WITH THE SRĪBHÂSYA OF RÂMÂNUJÂCÂRYA, vol.Ⅱ . pp.55-56, 62-63.
- (34) THE VEDÂNTASÔTRAS WITH THE SRĪBHÂSYA OF RÂMÂNUJÂCÂRYA, vol. I , pp.Lxvi-Lxix, 308-318; vol.Ⅱ . pp.Xxx-Lii, 65-117.村上真完, 『インド哲学概論』, 平楽寺書店, 1991, pp.12, 34-48, 86, 110-131,

350. Chari S. M. S., *ibid.* pp.307-308, 328-331.
- (35) 『梵我物峻別一如論学派の梵論』〔そのⅠ〕, 〔そのⅡ〕を参照。
- (36) Chari S. M. S., *ibid.* pp.238-242. Carman. J. B., *ibid.*, pp.179-198. Devamani B. S., *ibid.*, pp.36-45. Parrinder G., AVATAR AND INCARNATION, Oxford Univ., Press, ²1982 ('70), pp.13-130. 井原徹山, *ibid.*, pp.201-207.
- (37) ヤームナとラーマヌジャの語を引用する Parrinder G., *ibid.*, pp.37.
- (38) Parrinder は *ibid.* にバガヴァド・ギーター, IV, 7-8 を引用した分。
- (39) Carman. J. B., *ibid.*, pp.183 に, 梵の人格的な化身としてのクリシナ (ヴァースデヴァ王の息子) の真相を説明するラーマヌジャの言葉。
- (40) バガヴァド・ギーター, IX.Ⅱを引用する Parrinder G., *ibid.*, pp.38.
- (41) ラーマヌジャの主旨を解釈する Carman. J. B., *ibid.*, pp.189 【私の意訳】。
- (42) 20世紀中に世界各地で発生した共産主義的な革命という「新悪道」ではなく, 人間世界の諸相 (社会, 経済, 政治, 学界等) において, 正道が弛廃された時に天命 (神仏梵) は, 他の手段を尽くした後, 悪制度を崩壊させ, その責任者を正義の手で罰し, 失脚させた後, 本来の正しい人倫に基づく人間界の秩序を建て直すという意味での「革命」である。要するに「絶対生命」の異名同体である「梵」・「天」・「神」や「ALLACH」等の普遍的な秩序の復興の特別な道である。

基礎文献

- THE VEDÂNTASŪTRAS WITH THE SRĪBHÂSYA OF RÂMÂNĪJÂCÂRYA, vols. I, II, transl. Rangacharya M., Aiyangar M. B. V., Munshiram Monoharlal Publ., ³1989 (1899)
- Chari S. M. S., FUNDAMENTALS OF VISISTÂDVAITA, Motilal Banarsidass, 1987
- Carman. J. B., THE THEOLOGY OF RÂMÂNĪJÂCÂRYA, Ananthacharya Ind, Research Inst, 1981
- Dasgupta S., A HISTORY OF INDIAN PHILOSOPHY, vols II, III, Motilal Banar. 1975
- Kumarappa B., THE HINDU CONCEPT OF DEITY, Inter- India Publ. 1979
- Devamani B. S., THE RELIGION OF RÂMÂNĪJÂCÂRYA, CLS, 1990
- Pereira J., HINDU THEOLOGY, Motilal Banarsidass, ²1991 ('76)
- Radhakrishnan S., INDIAN PHILOSOPHY, Princeton Univ. Press 1957
- 井原徹山, 『印度教』, 大東出版社, ³1981 ('43)
- Vyas R., THE BHAGAVATA BHAKTI CULT AND THREE ÂCÂRYAS, Nag Publ. 1977
- Lâlâ Ch., PHILOSOPHY OF BHAKTI, B. R. Publ. Corp. 1989
- Parrinder G., AVATAR AND INCARNATION, Oxford Univ. Press, ²1982 ('70)
- Mâdhva S., SARVA-DARSANA-SAMGRAHA (全哲学綱要), Trübner & Co. ²1987 ('82)
- 島岩等訳, 『ヒンドー教』, セリカ書房, 1984
- 村上真完, 『インド哲学概論』, 平楽寺書店, 1991
- 湯田 豊, 『ウパニシャッド哲学』, 平楽寺書店, ³1989 ('85)
- Edgerton F., THE BHAGAVAD GITA, Harward Univ. Press, 1972
- 金倉圓照, 『インド哲学の自我思想』, 大藏出版, ³1983 ('73)
- Sinha K. P., THE SELF IN INDIAN PHILOSOPHY, Punthi Pustak, 1991
- Grimes J., THE SEVEN GREAT UNTENABLES, Motilal Banarsidass, 1990
- Copalan S., JAINISM AS METAPHILOSOPHY, Sri Satguru, Publ. 1991
- Sharma R. M., ENCYCLOPAEDIA OF VEDANTA, Eastern Books, Linkers, 1993

Lakshamma G., THE IMPACT OF RAMANUJA'S TEACHING ON LIFE AND CONDITIONS IN SOCIETY, Sundeeep Prakashan, 1990.

参考文献

- 田中美和太郎,『アリストテレス』,中央公論社,1979
- Light foot J. B. Harmer J. R., THE APOSTOLIC FATHERS, Apollos. ³1990 (1891)
- 谷 隆一郎,『アウグスティヌスの哲学』,創文社,1994
- トマス・アクィナス,『神学大全』,山田晶(訳),中央公論社,1980
- 沢田和夫,『神学大全入門』,あかし書房,1987
- 野田又夫,『デカルト』,中央公論社,²1986 ('78)
- デンシンガー・シェーンメッツァー,『カトリック教会文書資料集』,1974
- ジェコブス・H.『キリスト教教義学』,聖文舎,²1982 ('70)
- 熊谷政喜(編),『キリスト教概論』,新教出版社,⁶1989 ('84)
- Hartshorne C., OMNIPOTENCE AND OTHER THEOLOGICAL MISTAKES, NYU Press, 1984
- ディフール・L. X,『聖書思想辞典』,三省堂,1983
- 佐藤敏夫,『救済の神学』,新教出版社,1987
- 小川一乗,『仏性思想』,文栄堂,1982
- 日本仏教学会(編),『仏陀観』,平楽寺書店,1988
- 常盤大定,『佛性の研究』,国書刊行会,⁴1988 ('73)
- 武邑尚邦,『仏性論研究』,百華苑刊,1977
- 高崎直道,『宝性論』,講談社,1989
- 福原亮敏,『業論』,永田文昌堂,1982
- Kloetzli W.R., BUDDHIST COSMOLOGY, Mtilal Banarsidass Publ. ²1989 ('83)
- 勝又俊教(編),『真言の教学』,上下,国書刊行会,1981
- 宮坂有勝(編代表),『弘法大師空海全集』,Ⅱ,Ⅲ,筑摩書房,⁴1991 ('89)
- 小野清秀,『密教原理』国書刊行会,²1986 ('15)
- 高神覚昇,『密教概論』,大法輪社,1989
- 加藤精一,『密教の仏身観』,春秋社,1989
- 神森隆浄,『弘法大師の思想と宗教』,日本図書センター,1976
- 中村宗一,『正法眼蔵』四卷,誠信書房,¹⁸1990 ('71)
- 岡田宣法,『正法眼蔵思想大系』,法正大学出版局,²1976 ('54)
- 西有穆山,『正法眼蔵啓迪』,上中下,大法輪閣版,⁴1990 ('65)
- 田中晃,『正法眼蔵の哲学』,法蔵館,1982
- Abe M. A STUDY OF DŌGEN, NY Univ. Press, 1992
- Cleary T., RATIONAL ZEN, Shambhala, 1993
- 寺田弥吉,『親鸞の哲学』,太陽出版,1984
- Chan W. T., CHINESE PHILOSOPHY, Princeton Univ. Press ⁴1973 ('63)
- 加地伸行(編),『老子の世界』,新人物往来社,1988
- 大濱 皓,『朱子の哲学』,東大出版会,1983
- LE GRANDI RELIGIONI, vols.Ⅲ, V, Rizzoli Editore, 1964
- Eliade M., STORIA DELLE CREDENZE E DELLE IDEE RELIGIOZE, Sansoni Ed., 1979

Eliade M., PATTERNS IN COMPARATIVE RELIGION, Sheed and Ward, ²1971 ('58)

Eliade M., COSMOS AND HISTORY, Harper T., 1959

Campbell J., THE MASKS OF GOD: ORIENTAL MYTHOLOGY, A Viking Compass Book, 1971

八木誠一, 『パウロ・親鸞・イエス・禅』, 法蔵館, ²1986 ('83)

門脇佳吉, 『道の形而上学』, 岩波書店, ³1991 ('90)

Resume

BRAHMANOLOGY OF HINDUISM

【Part 3】

PRINCIPAL THEOLOGICAL CHARACTERISTICS OF DOCTRINES OF THE FIVE ESSENTIAL VIRTUES OF BRAHMAN'S NATURE, HIS SOVEREIGN IMMANENTO- TRNSCENDENT ACTIVITY, HIS INCARNATIONS AND THE THEORY OF COSMIC IMPERFECTION AS DEPICTED BY THE SCHOOL OF VISISTĀDVAITA VEDĀNTA

In the preceding 2 papers I'd outlined the essentials of Visistādvaitic philosophical and theological doctrines emphasizing the immanento-transcendent, accessible-inaccessible, inseparable yet autonomous, phenomenal yet transphenomenal, spiritual, trans-personal, essentially immutable, all-vitalizing, self-existent and causal character of Brahman's self-manifesting and self-actualizing nature.

This paper deals with the five essential virtues and five unique omnipotent powers of Brahman's polyphanic activity, where He is pictured as the fundamental, universal and Sovereign Lord (i. e. A and Ω) of all polymorphic cosmicization, preservation and decosmicization (i. e. the return to the pre-cosmogonic state of affairs) of His eternal body. The theological evaluation of the theories, in principle, is based on the research of outstanding scholars of Indian and Christian philosophy, theology and comparative religion; Rangacharya M., Chari S. M. S., Dasgupta S., Carman J. B., Parrinder G., Eliade M., etc.

Chapter I explains the infinite immanence and simultaneous transcendence of self-existence, impartial omniscience, undisturbable enstatic bliss, absolute sovereignty, unmatched omnipotence and unblemished perfection of innumerable virtues, which constitute the essence of Brahman's innate nature.

Chapter II analyzes Brahman's eternal and innate self-existent vitality, and His pancreative, pananimative, pancrative and inert activity. This Supreme Person, out of His free will and gratuitous love pondered: 'May I become many and be born again...'. Then, through the revitalization of the primordial 'Golden Embryo' (containing all souls in the state of inertion), causing the transformation of the totally quiescent 'Proto-Matter' and effectuating the process of souls' incorporation (acc. to the Karma Laws), Brahman began a long process of voluntary manifestation of His eternal body.

Theologians of Visistādvaita discern the following fundamental spheres of Brahman's polyphanic activity and phenomenal self-actualization. i. e.: the impenetrable world of His self-sustaining vitality; creation and cosmicization of His body's spiritual and material realms; continuous trans-penetration and vitalization of all cosmic realities; harmonious and amicable reign over all micro and macro-cosmic entities; and decosmicization

of all beings. In the meantime, some souls can attain the state of perfect emancipation and blissful union with Brahman in His glory. There is neither being nor a slightest mutation which could escape Brahman's creative, vitalizing and dismantling activity.

Chapter III presents the Vistâdvaitic criticism of Advaitic theory of the Power of illusion, which obscures and falsifies the true reality of Brahman, Universe and the nature of their relationship. Visistâdvaita censures, first of all, the 'semi-reality' of 'mâyâ' and 'avidyâ', their unspecified origins, ability to hamper Brahman's activities, and the easy way of their destruction through the attainment of the absolute monistic knowledge. Then follows the presentation of the doctrine of Brahman as the marvelous and unsurpassable Cosmic Vitalizer (Mâyin), emphasizing the unfathomable and immanento-transcendent character of Brahman's unlimited and unhindered activities. On the other hand, the s. c. 'mâyâ' or 'avidyâ' is understood here as the original limitation in the essence of all cosmic beings, which ultimately depend on Brahman in their existence and activities. These two doctrines point to the ontic source of all cosmic imperfections, including the roots of all evils.

Chapter IV gives a compact survey and explanation of Brahman's most revered names, which unfold the essential spheres and characteristics of His eternally impenetrable divine nature.

Chapter V delineates the Visistâdvaitic doctrine of Brahman's polyphany. I've emphasized here the relation between the purpose of Brahman's anthropomorphic incorporations, the freedom of human will, and our ultimate emancipation (salvation).

The principal theological and anthropological characteristics of the theories analyzed above can be summarized as follows:

- ① Brahman "IN SE". "A SE" & "PER SE" possesses infinite virtues and powers, among which SELF-EXISTENCE, OMNISCIENCE, ENSTATIC BLISS, OMNIPOTENCE and UNBLEMISHED PERFECTION constitute the fulcrum of His impenetrable personality.
- ② Brahman is the "A & Ω", PANCREATOR, PANANIMATOR, PANCRATOR, PLACE OF THE ETERNAL REST AND EMANCIPATION OF ALL and SAVIOUR of all who love Him dearly.
- ③ All beings are LIMITED "IN SE". They will never become IDENTICAL WITH Brahman, and will never escape the WORLD OF HIS LAWS.
- ④ Brahman CARES about the humanity and through His ANTHROPOMORPHIC INCARNATIONS calls all to PARTICIPATION IN HIS BLISS yet NEVER AGAINST our free will. This salvation is neither compulsory nor automatic, it is THE FRUIT OF OUR LIVES [自業自得—you will get the fruits of what you'd sown].